
ASCENDANT PRELUDE -head-

早村友裕

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

A S C E N D A N T P R E L U D E - h e a d -

【Nコード】

N 3 4 4 5 0

【作者名】

早村友裕

【あらすじ】

セフィロトの追手を逃れ、国境を越えたラック。しかし、リユケイオンで待っているはずのアレイは軍神アレスの居城に囚われたまま——ラックは、新たな仲間の協力を得て、居城への潜入を試みる。無事再会し、共に海を越えることはできるのか？ L O S T C O I Nシリーズ第二幕放浪編、第二部です

．．． はじまり ．．．（前書き）

この作品は「LOST COIN」シリーズの「第二幕・放浪編
第二部」にあたります。

ここから読み始める事もできますが、もしよろしければ「第一幕・
滅亡編」からどうぞ。

「LOST COIN」シリーズまとめページ←

<http://sky.geocities.jp/lostcoin/lostcoin.htm>

ブログ「また、あした。」

<http://lostcoin.blog.shinobi.jp/>

- - - はじまり - - -

4年前、戦争が終結した。

悪魔を崇拝するグリモワール王国と、天使を崇拝するセフィロト国との凄惨な戦いの末、グリモワール王国はディアブル大陸から姿を消した。

グリモワール王国は滅びた。それは事実だ。

でも、悪魔を信じる人々が滅びたわけじゃない。崇拝する心が滅びたわけじゃない。悪魔たちが滅びたわけでも、魔界が滅びたわけでもない。

それはおれの身内に巣くう多くの悪魔が証明している。

いつか、悪魔の王国を再建するためにおれたちは旅だった。

必ず力をつけて帰る事を約束した。

だから――

「感覚を研ぎ澄ませ……そうだ。お前なら出来るはずだ」

耳元に囁かれた言葉に、全神経を集中した。

周囲の木々のざわめきに溶け込んだ4枚翼の天使の声は、静かにおれの感覚と同調していく。

穏やかな自分の鼓動が聞こえる。風が肌で感じられる。目を閉じているのに、周囲のヒトたちがおれを見ているのが分かった。

背後のウリエル、そして見守っているルウナーとモーリ、そしてアウラ。

「お前が望む気配を探るんだ、黄金獅子の末裔。俺様が援護してや

る、心配すんな」

体の隅々にまでアガレスさんの力を充たしていく。

そして、全身で気配を読んだ。

孤高の伝道師たる異名を持つ4枚翼の天使の援護を受け、再び軍神アレスの居城の中に感覚を侵入させていった。

「お前の中にある血を探せ」

おれの中の血——戦場で一度死んだ時に俺の中で混ざり合った魔界の剣士マルコシアスの血。

世界中で一番大切なヒトと同じ血。

その中にある気配を探るうち、背後にいるはずの天使の気配は遠ざかっていった。

居城全体が不思議な香りと不思議な気配に満ちている。

悪魔とも天使とも違うこの気はきつと『オリュンポス』が召喚する精霊の気配なのだろう。

その流れの奔流にのみ込まれぬよう、よく知る悪魔の気配を探していった。

どこにいるの？

その時、左腕に痛みが走った。

ラースが反発している。

こっちだ。

忌み嫌う悪魔の左手が、相反する片割れのもとへと導いてくれる。痛みで分散しそうになる意識を保ち、少しずつ居城の深部へと意識を進めていく。

以前にこの場所を覗こうとした時には、軍神アレスらしき人物に弾かれてしまった。

しかし、今度はウリエルがついている。

孤高の伝道師の気配は感じられなかったが、何かに守られている感覚があった。

大丈夫だ、お前なら出来るだろ？ と軽く言った天使の赤い瞳を思い出す。

真っ暗闇で両手を伸ばして探るように、少しずつ悪魔の気配の根源へと近づいていく。

左腕が痛い。

きつと、こつちだ。

分厚くのしかかってくる軍神アレスの気配に逆らうようにして進んでいった。

もう、近い。

最期に別れてから焦がれ続けた悪魔の気配がほんのすぐそこにある。

もう少しで、感覚に触れる――

「アレイさんっ」

叫んだ瞬間、感じていた気配が霧散した。

ばちん、と大きな音がして脳髄が揺さぶられ、その反動で感覚が手元に戻ってきた。

頭ががanganする。

ふらりと傾いだ体を、ウリエルが後ろから支えてくれた。

「よし、よくやった」

ウリエルはおれの頭にぽん、と手を置いた。

「見つけたな？」

「……見つけた」

不思議な気の流れの気配の中で、ひとつだけよく知る気配があった。

「いるよ、アレイさん。あの中に。マルコシアさんも一緒だ」

軍神アレスの力がおれの感覚を邪魔していたからひどく分かりづらかったけれど、確かに感じ取った。

「ありがとう。居城の中は軍神アレスの体内みたいだった。きつと、

あの中で気配を探るなんて一人じゃ無理だったよ」

「いんや、俺様はちいつと手助けしただけだ。あとはお前の力だヨ、黄金獅子の末裔」

目の覚めるような金髪に、長い前髪の間から覗く深紅の瞳。そして、漆黒の神官服——孤高の伝道師ウリエルは、背に広げていた4枚の翼を消した。

そして、よろけたおれを半ば抱えるようにして、地面に座らせた。一息ついて今度は自分の目で軍神アレスの居城を見下ろした。

この高台からは軍神アレスの居城がある都市ミウルメクスが一望できる。都市の中央に構えた白壁の周囲に積み木を重ねたような都市が放射状に広がっていた。太陽の光が反射して眩しいくらに輝く家々にはそれぞれ小さな窓があり、夜になるとこの街はまるで星空のように輝くのだ。

「アレイさん、マルコシアスさんを召喚してるみたいだった……何でだろう、いったい何があったんだ……？」

「悪魔の召喚を外にもらさねエほどの結界はつてやがるのか」

ウリエルの淡々とした声が、不安を掻き立てた。

「……本気だな」

何故か唇の端に笑いをのせたウリエル——神父のヤコブ「ファヌエルは肩をすくめた。

千里眼を持つこのヒトは、いったい何を考えているんだろう。おれよりずっと多くのモノを見て、ずっと多くの声を聞いているこのヒトはいま、いったい何を知っているんだろう。

おれに、いったい何をさせるつもりなんだろう……？

今でも、皆に何かを隠しているような気がしてならなかった。

「あのさウリエル」

「その名を呼ぶなっつってんだろ。俺様の名はヤコブだ」

「……ねえ、ヤコブ。何を考えてるの？」

「んあ？」

「おれたちに何をさせるつもりなの？」

「何だ、それ。炎妖玉の息子を助けたいつつたのはお前だろ？」

「んー、それはそうなんだけどさ。それに、ヤコブがそのために助けてくれてるってのも分かるんだけど……なんか違うんだよ」

そう言くと、ヤコブは金色の髪の間から深紅の瞳をちらつかせて笑った。

「何言ってるんだ、黄金獅子の末裔。俺様は天使だから嘘はつかねえヨ」

「嘘はついてないと思うよ？ でもね、何だろう、何かさ、おれに隠してない？」

そう尋ねたが、ヤコブは肩をすくめただけだった。

ヤコブがおれの力になってくれているのは本当だし、おれに危害を加える事もないだろうと思っていた。だからヤコブが何かを隠しているのが不安ではないのだけれど、ただほんの少し引かなかった。

SECT・1 ミュルメクス

リユケイオンとセフィロト国との国境から少し西にある街ミュルメクス。

国境に最も近い街アクリスよりもずっと大きなこの街の中心には、軍神アレスの居城がある。リユケイオンの伝統的な宮殿と闘技場のコロセウムを合わせた造りになっている不思議な円筒形の大きな建物は、真つ白な柱と壁に支えられている。

同じく四角く白い壁に塗り固められた家が積み重なるようにして造られた住居がその周囲を取り巻いている。

メインストリートを中心に整然と並んでいたセフィロトの街とは全く違い、細い路地が四方に伸び、気を抜くとすぐに迷子になってしまいそうな街だった。さらに四角い家の屋根が道になり、より複雑な立体地形になっている。

偵察を終えて宿へとまっすぐに帰ったのだが、とても自力で宿に辿り着ける気はしなかった。

「ただいま、シド」

「お帰りなさいませ」

一人留守番だったシドがベッドで迎えてくれた。すぐに囲むようにして椅子を並べて、作戦会議。

軍神アレスがアレイさんを強力な結界の中に閉じ込めていること、また、マルコシアスさんを召喚していることなどを報告した。

シドはそれを聞いて眉を寄せた。

「力ずくでも解放する気はない、という事でしょうか。クロウリー伯爵はそこから脱出しようとしている、と？」

「んー、どうだろ」

おれが感じたマルコシアスさんの力は、外には向かっていなかった。アレイさんがマルコシアスさんを召喚したのがあの結界を逃れるため、とは考えにくい。

でも、なぜ召喚したのかと聞かれれば、おれにも分からなかった。
「何しろ軍神アレスの力がなんだかすごく荒れていて……本体が見えなかったんだ。何処にいるのかも、姿がどんなのかも分からなかった。変なんだ。普通なら軍神アレス自身が何処にいるかなんてアレイさんを見つけるより簡単に分かるはずなのに。まるで、気配が分散しているみたいだった」

そう言うのと、隣に座っていたヤコブはにっと笑っておれの頭をぐりぐりと撫でた。

「よしよし、いいぞ。その通りだ」

その言葉に、ぼんやりと思う。

もしかして、もしかしなくても、ヤコブはおれの知ってる程度のことなんて全部お見通しなんだろう。それでもおれが成長できるように、導いてくれてるんだ。

だから何か隠しているように感じるのかな……？

ヤコブにはすでに今回の騒動の最期が見えているのかもしれない。

「ヤコブ」

「ん？」

それを尋ねようとして、やめた。

きつと誤魔化すように笑われるだけに決まっているんだ。

「ごめん、何でもない」

「賢明だな、黄金獅子の末裔」

まるでおれがいま何を聞こうとしたか知っているかのように。

「……ヤコブはなんでも知ってるね」

「さあな、俺様はただの神父だから、何にもわかんねえヨ」

「そんなことないよ。ヤコブは何でも知ってる……もしかして、いまおれが何を言おうとしたかも知ってるの？」

「もしお前が俺様の予想した通りの人物で、予想した通りの思考をしていたなら、俺様の頭の中にはお前の考えと同じ予想が存在するという事になる」

「それって、知ってたってことじゃないの？」

「お前がそう思うならそうかもな」

何を悟らせる気もない、曖昧な返答。

「……ほんとにおまえはめんどくさいヤツだな」

唇を尖らせると、ヤコブはまた笑っただけだった。

それを見て女医のアウラがため息をつく。

「おい、ヤコブ。あまりグレイスを苛めるな。他人のモノ^{ヒト}だろう？」

「いいじゃねえか、アウラ。こんな一途なイキモノを見てたら苛めなくなるのが人情ってもんだろ？」

「何が人情だ、このエセ天使が」

鼻で笑い飛ばしたアウラ。

「とりあえずヤコブの趣味嗜好は置いておく。まずは、どうする？」
先ほど、アレイさんが確実に軍神アレスの居城にいる事は分かった。

しかしアレイさんの意思なのかどうかはわからないが、正面から
迎えに行ったら追い返された。

だとしたら、次は――

「とにかくアレイさんに会う」

手段は問わない。

軍神アレスの居城に押し入るか、なんとか中に入り込むか……ど
うにかして本人に会わないことには始まらない。

「会えたら、きっとなんとかなる」

きつぱりと断言すると、今度はモーリが軽く手を挙げて発言した。
「それに関しては、僕に提案があります」

眼鏡の奥の優しい瞳を細めて。

「アウラさん、今年の武道大会はいつでしたか？」

「武道大会？ ああ、あと一ヶ月ほどだと思うが」

「ちよつと、まさかモーリ」

「はい、その通りです。忙しくなりますよ」

にこにこ笑うモーリを見たルウナーとアウラは大きくため息を
つき、シドは分からなかったのか首を傾げた。

対してヤコブは肩をすくめた。

「ふうん、まあ、事を荒立てたくなければそれが妥当だろうヨ」

おれは意味が分からなくて首を傾げた。

「なあ、何の話だよ！ モーリ、いったいどうするんだ？」

「軍神アレスの居城があるこの街では、毎年この時期に武道大会が行われるのですよ。リュケイオン全土、それだけでなくディアブル大陸全体から――セフィロト国や、数年前までは旧グリモワール王国からも多くの人が参加していました」

先ほど丘の上から見下ろした軍神アレスの居城を思い出した。

あの円筒形の建物の中は空洞になっていて、そこには大きな闘技場があるという。太古から多くの戦士が力を競い合ってきた場だ。

「もつずいぶん昔の事になりますが、グリモワール王国から騎士団員の選抜部隊が参加したこともある、と聞き及んでおります」

シドが付け加える。

「まあ、今回は先日セフィラの神官の領権侵害の後だから、今年はどうなるか分かんねえけどな」

「そうですね、非常に残念なことです」

モーリは困ったように笑った。

「さて、武道大会には、このミウルメクスに非常に多くの人が集まります。そして、武道大会の日だけは唯一、軍神アレスの居城が解放される日でもあります」

そう言えば、軍神アレスの居城に行った時、アウラがそんな事を言っていた気がする。

「武道大会の優勝者には軍神アレスへの挑戦権が与えられるのです。無論、演武という形ですが、戦いの象徴である軍神アレスとの演武は、戦士にとってはこの上ない名誉です」

「んじゃあ、おれはそれに出場して優勝したらいいの？」

ぐつと拳を握る。

全土から集まる戦士たちがどれほど強いのか想像も出来なかったが、もしその先にアレいさんと会えるのなら、負ける気はなかつ

た。

「少しだけ違います。グレイス、もう少しだけ説明してもいいですか？」

「あ、うん、邪魔してごめん。続けて、モーリ」

「はい。武道大会には、『神前舞踊』と呼ばれるものがあります。実際の武道大会を開催する前に、軍神アレスに対してこれから行う大会を見守ってくれるようにと祈りを捧げるための舞踊です。選ばれた3名の『踊り子』たちが剣舞を披露するのです。踊り子、といっても一般的な意味ではなく、あくまで軍神への祈りを捧げる役目であり、求められるのは飾りの美貌ではなく、強さを持った美しさ」
モーリはにこりと笑った。

「グレイス、貴方はその踊り子を目指しましょう」

「おれが？」

「ええ、そうです。踊り子に選ばれた者は、武道大会の前日、実際に軍神アレスと謁見する機会が与えられます。その時には軍神アレスの居城のかなり奥まで入り込めるはずですよ」

「踊り子って……おれに似合わないよ。武道大会に出場するのなら分かるけどさ」

「いえ、確かにグリフィス女爵はお強いですが、武道大会にやってくるのはディアブル大陸全土の戦士たちです。かなり勝ち進めるとは思いますが、優勝は難しいでしょう」

きつぱりと言って首を横に振るシド。

「そう？ でもさ、踊り子ならルウナーじゃない？」

首を傾げると、おれ以外の全員が一斉に首を振った。

「私は本当にただの踊り子だもの。軍神アレスの求める『踊り子』とは違うわ」

否定するルウナー。

「確かにその発想なかったが、グレイスなら『踊り子』に合いそうだ」

頷くアウラ。

「きっとグレイスなら『踊り子』になれると思いますよ」

モーリがにこにこ笑いながら言ったこの言葉には既視感があった。

「最初に見た時から、僕はグレイスが舞台映えすると思っていましたから」

ああ、そうか。

おれを戦女神フレシアにしようとした時の言葉と一緒にじゃないかなんとか騙されているような気がしなくもないけど。

「おれにできるかなあ……？」

「できますよ」

モーリが断言した。

その言葉には強い力がこもっていて、なんだか安心した。

モーリがそう言うのと本当に出来そうな気がするから不思議だ。

「どうしますか、グレイス。時間はあまりありませんが……やってみますか？」

自分に踊り子の才能も何もないと思ってはいるけれど。

でも、モーリが言うならきっと出来るんだろう。

何より、アレイさんに会えるならおれは何だってするよ。

「うん、やってみる」

それを聞いてモーリはにこりと笑った。

「では、さっそく練習ですね」

SECT・2 迷い猫の帰還

次の日から、おれはルウナーの指導のもと、練習を開始した。

テントをアレイさんがぶっ壊してしまった今、立方体の形をした宿の屋上にある広い空間が練習場所だった。何処からともなく吹き来る風は相変わらずお香の匂いがした。複雑に絡んだ香りが鼻腔をくすぐる。

屋上には何もなく、ただ白く四角い床があるだけだった。

武道大会まではたった一ヶ月、踊り子を決める審査開始まではたったの3週間しかない。すでに申し込みは済ませてしまい、あとはおれ自身がどうにかして踊り子らしくなるだけ。

シドは、ちょうど傷が癒えるころだから回復具合を見るためだと主治医のアウラを説得して武道大会への出場を決めたいらしい。

その代わり、出場しても無理はしないことと、この一ヶ月間はベツドに釘づけになるというのが条件だったようだが。

「おれも武道大会、出てみたかったなあ」

「残念だったわね。でも、『踊り子』の方もきつと楽しいわよ？」

何しろ軍神アレスに捧げる踊りだから、審査では実際に組手をさせられることもあると噂に聞くわ」

「単純に戦うんだったら自信あるよ。でも、踊りとかはやったことないからなあ」

「いまは言っても仕方ないわ。さあ、練習しましょう」

「はい」

しかも、練習すべきは『踊り子』に関するだけではない。

知名度のある方が『踊り子』に選出されやすい、というヤコブの情報から、同時進行でリオート・シス・アディーンの舞台をやる事になったのだ。

一週間後から始まる歌劇団ガリゾーンの公演で戦女神フレイア

の役を演じ、姿と名を売る。

その一方で、3週間後から始まる『踊り子』審査に参加する。

モーリの言う通り、忙しくなりそうだった。

当のモーリは、セフィロト国の出国前に劇団のテントがなくなっ
てしまったので、劇場を貸し切る為に走り回っている。ミウルメク
スで最も大きな場所を借りるつもりらしい。

というのも、劇団ガリゾントは、直接的な損失が大きかったた
めにセフィロト国からずいぶんと保証金をふんだくったらしい。せ
つかくだから、と新しいテントを注文して残った金額で大きな公演
をしよう、というのがモーリの提案だった。

しかし、豊穡神フレイの役をやる予定だったアレイさんは不在、
ロキ役のシドは重傷、フェリスは表向き失踪ということになっている。
る。

重要人物がかなり欠けた状態で、公演はできるのだろうか？

「ねえ、そう言えばさ、アレイさんがやるはずだった豊穡神フレイ
の役は誰がやるの？ それに、怪我してるシドともういないフェリ
スの役はどうするの？」

「あら、聞かなかった？」

ルウナーは首を傾げた。

「シドがやっていたロキ役は、ヤコブ神父が引き受けてくださった
のよ？」

「え、ヤコブが？」

意外だ。

あのヒトもアレイさんと一緒に、お芝居には全く興味がなさそう
なのに。

「フェリスの役だったサヴァール・ヴァイナー將軍は、グリックが
演るわ。シドとフェリスが来るまでは、うちの花形剣舞師だったも
の」

グリックは歌劇団ガリゾントでは数少ない立派な体格をした役
者の一人。堂々とした体軀は、サヴァール・ヴァイナー將軍にぴっ

たりだろう。

「悪いけど、グリックの方が、フェリスの百倍は似合ってるよ」

「そうね」

ルウナーもくすくす、と笑った。

「フェリスの普段の様子からみたら、ずいぶん上手に演じ分けているなと思ったけれど」

「うん。おれも初めて見た時びっくりしたよ。でもさ、確かにフェリスは強かったし、大剣を扱うのもうまかったけど、將軍って感じじゃなかったもんね。どっちかというとき、ロキの方が似合ってたんじゃない？」

「ええ、そうなのよ。最初はシドをサヴァール・ヴァイナー將軍に、フェリスにロキを当てるつもりだったのだけれど、どうしても、つてフェリスが言うから役を交代したのよ」

「ふうん、何でフェリスは將軍役の方がよかったのかな？」

首を傾げると、その瞬間、背後から声がした。

「そーりゃあ、將軍役の方がシドを殺しやすかったからだぜ？」

はっと振り向くと、そこに立っていたのは金髪黒二ツトの男。

「よーお、グレイス、ルウナー。元気っ？」

「フェリス?!」

おれは思わずルウナーを背に庇っていた。

完全に油断していた。

フェリスの首に下がるのは悪魔のコイン。

おれがその気配に気づかないなんて――

「おおっと、攻撃しないでよ、グレイス。オレっちは争いに来たわけじゃないんだ。喧嘩したら今度こそシアさんに愛想つかされっちゃうよ」

ひよい、と肩をすくめたフェリスは、黒二ツト帽の下セルリアンの瞳を細めて笑った。

心臓がばくばくと脈打っている。

だって、目の前にいるのは神官マルクトを慕うセフィロト国の人間。

しかも大剣でシドを貫いた――

「いったい何しに来たんだよ、フェリス」

落ち着け、落ち着け。

フェリスに敵意はない。本気になれば尋常でない殺気を放つ彼の事だ、闘うつもりがないというのは本当だろう。

大きく深呼吸をしてからもう一度フェリスを見ると、少しだけ冷静になった。

ただ、酷く気まぐれなこの獣は、いつまた敵意を向けてくるからなかった。

「もうシドは傷つけさせないよ。もちろん、ルウナーだってモーリだって、誰ひとりお前に傷つけさせない」

「ひひっ、強いね、 그레이ス。 ダイジョウブ、オレっちはこの劇団の中では誰も傷つけないよ――天界の長メタトロンの誓う。それとも、魔界の王リユシフェルに誓った方が信じられるならそうするけど？」

「……」

天界の長メタトロンの誓う。

それがどれほど重い意味を持つのか、おれには分からなかったけれど。

ただその言葉を口にしたフェリスの心は本物のような気がしたから。

おれがほんの少し警戒を緩めたのが分かったのか、フェリスはにっと笑った。

「ん、グラティアス」

それは、セフィロト国の古代語で『ありがとう』。

聞き覚えのあるその言葉は、旧グリモワール王国領からセフィロト国を横断してくる間に、多くの人から聞いたものだった。

「モーリからリオート」シス」アディーンの舞台やるって聞いたんだけどさ」

「え、モーリに会ったの？」

「だってさ、オレっち、勝手にここを出てったじゃん。やっぱ戻ってきて最初、座長に謝るのが筋つてもんじゃないかね？」

モーリはフェリスのことを危険だと思わなかったのだろうか。

他の団員には伏せてあるが、モーリとルウナーだけはフェリスがセフィロト国の間者であった事を伝えてあり、シドを傷つけたのもフェリスであることを伝えてある。

でも、モーリはフェリスを追い返したりしなかった。

ルウナーがぼん、とおれの肩に手を置いた。

「モーリが何も言わなかったのならきつと大丈夫よ、 그레이ス」

「……うん、そうみたいだね」

少なくとも、いまは。

モーリは時々人の根底までも見透かしたような事を言う。まるで占い師のようなその言葉には不思議と説得力がある。

きつとモーリにはおれたちには見えない何かが見えているんだろう。

完全に、とはいかないが警戒をといた。

「何しに来たの？ フェリス」

「何って、オレっちここの団員じゃん。帰ってきただけ」

「おい、ちょっと待てよ、フェリス。お前はシドのこと刺してんだぞ。そんなヤツがもう一回戻ってきたって」

「あん時はシアさんのために 그레이スを殺そうとしたからだよ。単純にアイツが邪魔だっただけ。今度は、だって、シアさんから 그레이スを殺すなって言われんだから。それにオレっちの正体もバレてるから口をふさぐ必要もないし、誰も殺さないよ」

ひらひら、と手を振ったフェリス。

言っていることは破綻しているが、なぜかフェリスが言っていると本当に聞こえるから不思議だ。

迷うおれの前に、ルウナーが進み出た。

「フェリス」

「なあに、ルウナー。今日もかわいいねえ」

「ありがとう、フェリス」

賛辞にはにこりと微笑み返し。

「貴方がシドを傷つけたこと、絶対に赦さないわ。でも、私とモーリ以外は、貴方がシドを傷つけようとして傷つけたことを知らない。誤ってシドを傷つけて、ショックで逃走したとみんな思っているの」
「あら、そーなの？ オレっちゃんかなり覚悟して帰ってきたんだけど？」

「モーリが許容したのなら、私もいまのところは受け入れるわ。きつと団員の大半がそうするでしょうから」

ルウナーがきっぱりとした口調で言い切った。

それでも、その声は震えていた。

「ありがと、ルウナー。よかったあ、ここに戻ってきて」

おれはどうしても腑に落ちなかった。

だってフェリスは敵で、マルクトを慕っていて、シドを傷つけて

「シドには私から話すわ。きつとシドは自分の事よりグレイス、貴方の心配をするでしょうけれど」

「何で？」

「……そんな事を言っていると、またシドにお説教くらうわよ」

ルウナーは不吉な事を言う。

そしてそれはきつと近いうち、事実になる。

フェリスは、あ、そうそう、とぼん、と手を打った。

「話は戻るんだけどさ、モーリに舞台やるって聞いたよ。でっかい劇場を貸し切るんだって？」

「ええ、そうよ。サヴァール・ヴァイナー將軍の役はグリックがやるわ。ロキ役は神父のヤコブ・ファヌエルという方が引き受けてく
ださった」

「豊穰神フレイはどーすんの？」

「まだ決まっていらないわ」

公演一週間前だというのに、相変わらずだな。

他人ごとではないのだけれど、そう思ってしまった。

「最悪、豊穰神フレイの台詞は、戦女神フレイアが言うのよ。つまり、グレイス、代わりに貴方がやるの」

「えっ、おれ?!」

「そうよ。もともとフレイアとフレイの役どころは似ているし、一緒に舞台に出るのはラストシーンだけだったから。不自然にならないよう、モーリが台本を書き変えてくれるわ」

無理、とは言わなかったが、かなり厳しかった。これから舞台だけでなく、『踊り子』の試験もあるのだ。それなのに、台詞が倍増したら……!!

「んじゃあさ、オレっちが演ろうか？」

フェリスが肩をすくめた。

「最初の予定通り、オレっちが口キ役をやるよ。その神父サマが豊穰神フレイをやればいいんじゃないかね？」

SECT・3 "敵";

フェリスはそのまま団員たちに挨拶に行くようだったが、とても野放しにすることは出来なかった。

たとえモーリが許容して、ルウナーが受け入れても、実際に剣を交えたおれだけは、油断するわけにいなかった。

「なーに？ グレイス、オレっちについてくんの？ オレっちのこ
と好きなの？」

「んー、好きかと聞かれるとたぶんそんな好きでもないよ。だって
シドのこと殺そうとしたし」

「うわ、そこは嘘でも好きって言ってよー」

けらけらと笑うフェリスは、何の前触れもなく屋上から飛び降り
た。

音もなく柔らかに着地する姿は、相変わらずしなやかな獣のよう
だった。

それを追って飛び降りたおれの後ろからルウナーの声が追ってく
る。

「フェリス、グレイス、シドのところは最後にして！ いまから私
が行って話してくるから」

「わかった！」

ひらひらと手を振り返し、フェリスに視線を戻す。

猫のようなセルリアンの瞳がどこを見ているのか、おれには分か
らなかった。

「なあ、フェリス。お前、本当に何で戻ってきたんだ？ シアに何
か言われたの？ おれのことを監視しろ、とか」

「んー、まあ、そんな感じかな？」

「だろうね」

そうじゃなきゃ、此处へ帰ってくる理由などないだろうから。

「でも、おれが簡単に受け入れると思ってるの？」

「思ってるけど？」

フェリスは当たり前のように言った。

「だってグレイスはオレっちのこと分かってる気がするもん。なんだかグレイスはオレっちとどっか似てる気がしてさあ」

「……何でそんなに自信満々なんだよ」

ふい、とフェリスから視線を外してそっぽを向いた。

返答に困った時にこうして視線を逸らす癖は、アレイさんのがうつったのかもしれない。

「それよりフェリス、怪我は大丈夫だった？ フラウロスさんと戦ったときにかなり火傷したと思うんだけど」

大丈夫だった、と聞くこと自体がもうフェリスを敵でないと認識してしまっている証拠だ。警戒を解くな、油断し過ぎだ——アレイさんならそう言ったかもしれないけれど。

「もう治ったよ。たぶんね」

「たぶん？」

「グレイスは知ってるよね、オレっちが痛みには鈍いって」

ああ、そうだ。

前回、戦った時に分かったのだが、フェリスは感覚が鈍いらしい。怪我の痛みもほとんど感じないようだったから、怪我をしている事に気づかず、また、治っても治ったのかどうか自分でも分からないんだろう。

「怖いね、それ」

「何が？」

人より鋭い感覚を武器にするおれにとって、『感覚が薄い』というのがいったいどういう状態なのかは分からなかった。

「おれは人よりちょっと目がよくて、耳がいいからさ。それがたとえ『痛み』に対する感覚でも、感じ取れないんだと思ったら、おれは怖いよ」

フェリスが第44番目の悪魔シャックスを使っておれの五感を奪った時、本当の闇の中で感覚を消失する恐怖を知った。何もない闇

の中、自分の意思さえも霧散するかと思った。

思わずフェリスの首に下がっているコインを見た。

第31番目の悪魔フォラスと第44番目の悪魔シャックス。

人並み外れた知覚とスピードを武器に戦うおれにとって、この二つのコインを持つフェリスは天敵だった。

「ふーん。オレっちはずっとこうだから、 그레이スみたいにたくさん見えた方が怖いけど」

「そう？」

「だって、前に戦った時、 그레이スの目で見て、耳で聞いた時、びっくりするほどたくさんの情報が流れ込んできたんだぜ？ あんな中で生きていくのは、オレっちには無理だね」

ひらひらと手を振ったフェリスは、自分の首に下がったコインをギョツと握った。

「いったい何を考えているのか、おれには分からなかった。」

「ところでさ、 그레이ス」

「なに？」

「ちょっとだけ、真面目な話してもいいかな？」

「フェリスの真面目な話って、どんな話？」

首を傾げて尋ねると、フェリスは天を仰いで嘆いた。

「うわ、なにその言い草。それじゃまるでオレっちがいつも不真面目みたいじゃん！」

「違うの？」

「ほんと、 그레이スって失礼だよな」

「お互い様だよ。で、なに？」

問い返すと、フェリスは悪魔のコインを首から外しておれに差し出した。

「コインを預ける代りにさ、オレっちを連れていく気はない？」

フェリスの唐突な提案に、おれは思わず口を開けて固まってしまった。

「……は？」

「分かりやすく言うと、お望み通り無抵抗になるからオレっちを一
緒に連れてって欲しいってことなんだけど」

「意味分かんないよ、フェリス。もっと簡単に言ってよ」

「えー？ これでも最大限に簡単な説明をしたつもりなんだけどな
ー」

ぶつぶつ言いつつも、フェリスは簡単に順を追って説明し始める。
提案元はシアらしい。

どうやら、シアはやはりマルクトという立場上、大っぴらに動け
ない。しかも先日、アレイさんを追ってリュケイオンへと領権侵害
し、かなりの叱責を喰らったらしい。

しかし、リュケイオンではアレイさんが軍神アレスに下ったとい
う情報が入ってくる。

けれども緊張状態にあるリュケイオンからは十分な情報が入らな
い。

しびれを切らしたシアは、フェリスに内情を探ってくるよう命令
したらしい。

「きっとグレイスといればアレイスター・クロウリーにも会えると
思ってた。それにシアさんが、あいつはお人よしだからコインを預
けるか命を預けるかすれば、傍に置くだろうって」

「……シアがそんなこと言ったの？」

「だってグレイスは、悪魔の国にいる時、シアさんと一緒だったん
だよな？」

「そうだけど」

魔界の王リュシフェルを狙って、かつて神官の一人マルクトはシ
ンシア・ハウンドとしてグリモワール王国漆黒星騎士団に入り込ん
でいた。
ブラックルビー

そう、まだ未熟なレメゲトンだったおれが漆黒星騎士団で修行を
していたとき、同じように騎士団員として稽古していたシアとは、
同室だった。

シアはおれの事をよく知っている——それがいいことなのか悪い

事なのかは分からなかったけれど。

「だから、コインを預けていい？　んで、一緒にいていい？」

にこにこと笑うフェリスの言っている意味が分からない。

ああ、もう、分からないことだらけだ。

「もう、フェリス、おまえよく分かんないよ！」

「何だよ！　こんなに分かりやすく言ってるじゃん！」

このままじゃ堂々巡りだ。

誰かに助けを求めよう。

そう思った時、真っ先に思いついたのは孤高の伝道師の赤い瞳だった。

「ヤコブ！」

ばたん、と大きな音をたてて扉を開けると、部屋でアウラと談笑していたらしいヤコブは、手にしたマグカップを口にしたまま、視線だけでこちらを見た。

「困ったからっていちいち俺様のとにくんじゃねーヨ、黄金獅子の末裔」

そう言ったヤコブの額に、アウラの掌がヒットした。

「何を言う。もうそろそろ来るはずだと言っていたのはお前だろう、ヤコブ。意地悪な事ばかり言っんじゃない……座れ、グレイス。その後ろの男もな」

「あ、うん。ありがとう」

おれはすすめられた通りに椅子に腰かけた。

無理やり手を引いて連れてきたフェリスもつられるように座り、リウケイオン独特の織物がかけられた椅子がぎしり、と啼いた。

口を開いたのはアウラの方だった。

「んで？　何しに来たんだ？」

開口一番、ヤコブはそう言った。

「ヤコブはさ、おれがこれから何を言うのか分かっているのに聞くん

だね」

「俺様がお前の言う事を知ってるわけねえだろ」

「……うそつき」

そう言い返して何が変わるわけでもないが、なんとなく理不尽だった。

おれは諦めてフェリスのことを紹介し、簡単に事情を話した。

「フェリスがいったい何を言ってるのか、おれには分かんないんだけど。だから誰かに聞きたくって」

「だあかあ、オレっちは最大限簡単に説明してるって！」

フェリスと二人、ここへたどり着くまでに何度繰り返したか知らないやり取りを繰り返す。

「ふうーん、それってそんな難しいことか？ 黄金獅子の末裔」
全部聞いたヤコブはそう言った。

「だが、混乱してるようだから、もう少しだけシンプルにしてやる
ヨ」

「マジで?! 『武器になるコイン預けるからここに置いて』これ
以上シンプルなんてオレっちには無理だよ?!」

「迷い猫はそこで黙っとけ。話の論点がズレる」
ぴしゃりとフェリスを言い含め。

ヤコブはおれに左手の人差し指を突き付ける。

「じゃあ聞け、黄金獅子の末裔。お前にとっての敵は誰だ？」
「敵……？」

聖騎士が最後に言い残した言葉がおれの中で木霊した。

金の髪と蒼い瞳が聖騎士装束によく映える彼は、おれを振り向いてこう言った。

——敵です

そこには何の慈悲もなく、ただ事実だけがあるようだった。

「敵……は、ケテルかな……？」

首を傾げながらそう言うと、ヤコブは鼻で笑った。

「相手^{ケテル}がなんて言ったかを聞いてんじゃねえ。お前の考えをきいてんだヨ」

「おれが？」

「ああ、そうだ。お前は、ケテルのことを『敵』だと思っているのか？」

そう問われて、おれは思わず口を噤んだ。

「……分かんない」

思い出すのは、光の中で振り返ったケテルが、おれに対して敵だと言った瞬間に感じた胸の痛みだけだった。

「でもおれは、ケテルが敵じゃなかったらいいのと思うよ」

敵なんていない。

傷つける対象なんて、この世に存在しなくていい。

なんて我儘で偽善的な言い分だろう。

たくさんのモノを傷つけて、たくさんのモノを失った自分が、そしてこれからたくさんのモノを破壊して進もうとしている自分が口にできるような言葉ではなかった。

「じゃあ、もう一回聞いてやるヨ、黄金獅子の末裔」

孤高の伝道師は、金髪の間から覗く深紅の目を光らせた。

「そこにいる迷い猫は、お前さんの敵か？」

SECT・4 騎士の許可

敵？

敵って、いったい何だ？

打ち負かす相手のこと？ おれに攻撃を仕掛けてくる相手？
それとも。

首を横に向ければ、きらきらと光るセルリアンの瞳がある。

「ダイジョウブだよ、オレっち、もうグレイスを傷つけたりしないよ。もしシアさんの気が変わって、また命を狙う事になったら、その時は真っ先に言うから」

ああ、そうか。

唐突に気付いた。

フェリスがおれと似ているところ。

「……アレイさん」

まるで呪文のように大切なヒトの名を呼んで、頭の中を整理する。
おれとフェリスの似ているところ。

こいつは嘘をつけない。そして、自分の中に敵をつくらない。

おれがケテルも軍神アレスも敵にしたいくないと思っっているように、
能動的に敵を認識しない。

敵だと認識するのは、自分や大切なヒトに刃を向けられた時と、
自分の大切なヒトが願った時だけだ。

フェリスは、マルクトを慕いながらも悪魔に対して偏見がない。
きつとおれと同じで、悪魔も天使も好きなんだ。天使を崇拜するか
らと言って悪魔を否定するようなことはしない。自分の感覚だけが
真実で、周りがどうかというのは全く関係ないのだろ。周囲の「
当たり前」に流されて敵を認識したりしない。

きつと、ガリゾントのみんなを傷つけない、と誓ったフェリス
の言葉は本当なのだ。

「仕方ないな」

だから、たとえ以前におれの大切なモノを傷つけていたとしても、いまは傷つけない、と言ったフェリスのことを敵だと思わないのかもしれない。

そう思ったら、なんとなく心が軽くなった。

「フェリス、今だけおまえを信じてやるよ」

「グラティアス、グレイス」

感謝の言葉を述べ、フェリスは首にさげていたコインをおれに差し出した。

第31番目の悪魔フォラスと第44番目の悪魔シャックス。

一瞬ためらったが、鈍く金色に光る二つのコインを受け取った。契約していないおれに対して、この二つのコインは熱を持たず、首から下げると胸元が冷える感じがした。

代わりに、右腕に穿ったフラウロスさんの契約印が一瞬だけ熱くなった。

「怒らないで、フラウロスさん」

箒手の上から契約印を撫で、落ち着かせる。

「結論は出たな、黄金獅子の末裔」

「うん。ありがとう、ヤコブ」

お礼を言って立ち上がる。

なんだかとてもすっきりした。

「行こうぜ、フェリス。ヤコブはめんどくさいって付き合ってくれないから、ずっと体動かしてないんだ。あっちで組手しようぜ！」

「あれれ、掌返したみたいに素直だね、グレイス。オレっちはそんなとこ、好きだけど」

肩を竦めたフェリスも椅子から立ち上がった。

部屋を出ようとしたおれに、ヤコブは最期の言葉を投げかける。

「黄金獅子の末裔、その『敵を作ることのできない』心は、お前にとって最大の武器だ。たくさんの人間と悪魔を、そして天使や精霊さえも惹きつけるだろうヨ。そして、お前は多くの味方を手に入れる事になる。だからこんな風に、お前の周りには人がたえねえ。立

場も人種も何もかも越えて、全員連れて来ちまう。だからお前は、自分の持つ力以上に強い」

再び大きなマグカップを口に運びながら、ヤコブはまるで気合の入っていない声で告げた。

「だが、それはお前の最大の弱点でもあるんだ——と言うわけで、組手の前に、その迷い猫と二人、くたばってる犬のところへ行つて叱られて来い。お前さんを叱るのは、俺様の役じゃねえからヨ」

「……っ！」

しまった。忘れていた。

おれにはまだ、最期の難関が待ち構えているんだった。

おれは、大きく深呼吸してからシドの部屋のドアをノックした。

「どうぞ」

部屋の中からシドの声。

そのトーンが怒っているのかどうなのか、おれには判断つかなかった。

意を決して扉を開くと、シドとルウナーが待っていた。

ほんのりと漂う香は、アウラが気を落ち着けるからと言って焚いた、ほんの少しすつとするシトロネラという植物の匂いだ。

「よっ、シド、元気か？」

「……手加減なしで突き刺したのはどこの誰だ、この馬鹿」

シドは藍色の瞳でちらりとフェリスを見た。

隠しもしない不機嫌さが現れて、思わずおれは足を止める。

「あれで死ななかったなんて、やっぱオレっちの予測通り、シドが一番手ごわかったってわけだ」

「グリフィス女爵、こちらへ」

フェリスの言葉を完全無視したシドは、ベッド脇の剣に手を伸ばしながら言った。

「……はい」

有無を言わさぬ口調で言い切ったシドに逆らう術はない。

おれはぎこちない足取りでフェリスから離れ、シドの方に寄った。
「貴様、いったい何故戻ってきた」

フェリスにそう問いながら、シドは重そうに体を起こした。

「何のためって、 그레이スを見張るためだけど？」

「巫山戯るな」
フザケ

静かに抑えてはいるが激しいシドの言葉に、びりり、と部屋の空気が揺れた。

「俺の目が届く範囲で、我が主に神官マルクト配下の者を近づけよう筈もない。即刻ここから立ち去れ」

「冷たっ！ 前から思ってたけど、シドってオレっちにだけ冷たくね？ 酷くね？ なあ、 그레이ス！」

「いや、だって、フェリスが先にシドを刺したんだから当たり前なんじゃ」

「グリフィス女爵は口を挟まないでください」

「あ、はい」

閉口。

シドの藍色の視線に気圧され、おれは口を閉じてフェリスと距離をおいた。

「先日、グリフィス女爵と戦闘したことは聞いている。その際に悪魔と契約していたこともだ。天使の国に住まう貴様がいったい何を考えているかは知らんが、そんな危険な存在を主に近づけるわけにはいかない」

「でも 그레이スはいいつて言ってくれたよ？ ほら、コインだって 그레이スが持つてるからオレっちにはいま、何の力もない」

フェリスの言葉で、シドの敵意はまるごとおれに矛先を変えた。
おれは首に下げたフェリスのコインを見せ、一応の言い訳をはじめる。

「ええとね、フェリスをここに置く代わりに、コインを預かったんだ。ええと、ほら、人質？ みたいなものだよ」

「グリフィス女爵、貴方自らこの男を手元に置く事を同意されたのですか？」

「うん。シドはフェリスに直接殺されそうになってるから嫌かもしれないから、出来るだけ近づけないようにするよ。おれは別にフェリスがここにいてもいいと思ってるんだけど……」

そう言うのと、シドの纏う空気が一瞬にして極寒まで冷え込んだ。

「グリフィス女爵」

「あ、はいっ」

思わず姿勢を正してしまう。

「この男に命を狙われたのは貴方も同じでしょう？　つい先日のお来事だったと記憶しておりますが、間違いでしたか？　それとももうお忘れになったのですか？」

分かっていた事とはいえ……始まってしまった。

「左手の怪我也治っていない状態で、また新たな傷を受けて……もう少し警戒なさってください。いつも申し上げているでしょう？」

「……」

おれは未だ包帯の取れない首の傷に触れた。

フェリスにつけられたこの傷は、一步間違えば大きな血管にまで達していただろう。

「だからさ、オレっちはもうグレイスと戦ったりしないって！　もしシアさんが殺せて言うてきたら、ちゃんと言うから！」

「その馬鹿は黙っている」

う、シドが冷たい。

「ご、ごめんね、シド。やっぱり自分の事を狙う相手がいるのは嫌だよ……？」

そう言うのと、シドは大きなため息をついた。

「私の事など捨て置いてください」

藍色の瞳がおれを貫いて、どきりとした。

「この男が、元グリモワール王国騎士団員だった私を、目的の為に排除しようとするのは道理です。それは事実であって、私自身の遺

恨は関係ありません。それより、私が気にしているのは貴方の身の安全です」

「おれは平気だ」

「平気だ、じゃありません。自覚してください」

淡々とシドはおれを諭した。

「貴方が理解してくださるまで、何度も繰り返します。貴方は、自らの身を軽く見過ぎている。いまだってそうだ。同じ部屋に敵国の手先を招いて、あるうことかそれを容認している——お願いですから、危機感を持ってください」

いつものお説教とは少しだけ違う、どこか悲しそうな響きを含んだシドの言葉と真剣な眼差しに、おれは首を項垂れた。

「ごめんなさい……」

またおれは同じ事を繰り返した。

おれが周りのヒトを大切に思うように、周りのヒトたちもおれを大切にしてきているんだって忘れそうになる。

「でも、おれはフェリスを敵だとは思えないんだ」

そう言う、シドはふう、と息をついた。

「承知しております。そんな貴方だから、私は主に選んだのです」
シドは素足でベッドを下りた。

しっかりと地に足をつけ、手にした剣の鞘に手を当てる。

「ですから、もしこの男が貴方に敵意を向けるならば、私が全霊で以て返り討ちにして差し上げましょう」

すらりと抜いた刃を真っ直ぐフェリスに突き付けて。

「この場で、魔界の王リユシフェルとこの剣に誓え。我が主に決して手出しせぬと」

「ふーん、そんでシドの気が済むんならオレっちは構わないよ？」

セルリアンの瞳をきらきらとさせながら、フェリスはその場に跪いた。

「いいよ、オレっちは、シアさんからの命令がない限り、絶対にグレイスを傷つけない。魔界の王リユシフェルと天界の長メタトロン

に誓う」

最後に刃にそつと指をあて、滑らせる。

つう、と玉のような血が指先に滲み出た。

「この血を証に」

にっとな笑いながらシドを見上げたフェリスは、指に滲んだ血を自らぺろりと舐めた。

「これで満足？」

「……この場はな」

剣を収めたシドは、ベッドに戻った。

「……グリフィス女爵」

「はいっ」

「明日から、出来る限り私も貴方の稽古に付き合います」

「え?! でも、シドはまだ怪我が……」

「たとえ武術大会までに治療が間に合わなくとも、付き合います」

有無を言わさぬ口調で言い切ったシドに、おれは返す言葉を持たなかった。

SECT・5 剣舞

剣舞の稽古を本格的に始めると、おれは見る見るうちにたくさんの事を吸収していった。

練習場所はいつも、シドの部屋の真上にある宿の屋上。重症のシドをベッドに縛り付けておくためのギリギリの妥協点だった。しかし、フェリスが定期的に窓から覗いてシドをからかうのだから、余計体に悪いんじゃないだろうか。

そんな心配をよそに、シドは順調に回復していた。

アウラによると、早く回復しなければ、という強い気持ちがうまく働いているらしい。

うーん、素直に喜んでいいんだろうか。

「んじゃあ、練習に行ってくるね！ シドは今日も大人しくしててよ。昨日みたいに屋上に来ちゃだめだよ！」

「貴方がフェリスと組手をするなどという声が聞こえなければ私もこの場所で大人しくしていますよ」

「いいじゃん、ちょっと練習するくらい！」

「あの男がどれだけ危険な存在か分かっていらっしやいますか？

刃を向けさせるなど言語道断、武器を持たせることだって許しません」

「シド厳しい……」

「貴方がもう少し危機感を持つてくだされば、私もこれほど口うるさく言いません」

ぴしゃりと言い含められ、おれは口を噤んだ。

「ですから、気をつけて、稽古なさってください」

「はい」

シドに釘を刺されてから屋上へ。

これもほとんど日課になっていた。

屋上では、ルウナーとフェリスが待っている。シドの理屈でいくと、戦う力を持たないルウナーがフェリスと二人でいる方がずっと危険だと思うのだけれど。

多少理不尽な気持ちを抱えながら、ようやく手になじんできた練習用の剣をしっかりと握る。

本物より少し軽く、刃もついていない。

武器ではない。ただ、舞うための道具だ。

両手にそれを握りしめ、とん、と地を蹴った。

柔らかな動きでふわりと舞い、空を切る速さで、しかし音もなく剣をふるう。

ルウナーを師匠に舞踏の稽古をしたことで、もともと得意だった両手剣は驚くほど華やかな演武に仕上がっていた。

舞いは、剣の道にも通ずる。

もともと風を使い、細やかな動きで敵を翻弄するおれの型――風ふう燕えんは、演武に近いものがあつた。

あとは、武道で言う残心さんしんを「余韻」という形で残し、ぴたりと動きを止めるだけだった。

指の先まで神経を張り巡らせ、視線を周囲に投げかけ、表情を作る。

魅せる、という事を考えると大げさに動く必要もあつたが、もともと独自流でムダの多い動きをしていたおれにとって、そう難しい事ではなかった。

無駄な動きのほとんどないアレイさんには、少し難しかったかもしれないけれど。

そう思つてくすりと笑い、練習を止めると、傍ですつと見ていたフェリスがぱちぱち、と気のない拍手をした。

「グレイス、本当に上手になつたんだなあ。オレっち、びっくりしちゃったよ。そうしてる間は、まるでグレイスじゃないみたい」

「何だよ、それ」

フェリスの言葉に笑うと、ルウナーも隣でため息をついた。

「ももとの体が出来ているから、上達が早いのね……これだけ早いと、嫉妬しそうだわ」

ルウナーはそう言って肩をすくめた。

「ルウナーの教え方が上手だからだよ」

「お世辞まで覚えなくていいのよ？」

お世辞じゃないよ、と言い返し、おれは再び練習用の剣を握った。剣舞の間はまるでおれではない何か体が支配しているかのようだった。そう、戦闘の中でおれが、自分の思う以上の力を発揮して戦う時のように――

戦うのが好きだと思ったことはない。

でも、剣舞は好きだと心から言えた。

舞台初日は、3日後に迫っていた。

本番3日前になると、本格的に舞台稽古が始まる。

もちろん、台詞はうる覚えだったが、公演まで残り3日間。とにかく慣れるしかない。

本番の舞台から客席を見ると、あまりに景色が違って驚いた。

まるで360度、あらゆる角度から観察されているかのようだ。

この席全部にヒトが座って、舞台を見下ろすなんて――想像しただけでも背筋が震えそうな思いだった。

口をぽかりと開けて客席を見上げていたおれを、ルウナーが舞台袖から呼んだ。

「グレイス、衣装合わせするからいらっしやい」

役者の控室にルウナーと二人。

衣裳係のリエッタが後で来るらしい。

「とりあえず既存の衣装を繕うのだけれど……ほとんどサイズは合っている気もするわ。グレイス、ちょっと着てみてくれないかしら？」

ルウナーに言われ、まるで見たことのない構造の服を手にとった。
「ルウナー、これ、どうやって着るの？」

「あ、ごめんなさい。いま手伝うわ」

戦女神の衣装を着るため、おれは服を脱いでいった。

ジャケットを床に落とし、アンダーウェアに手をかける。

上に着ていたものを一気に脱いだところで、背後からルウナーの視線を感じた。

「……痛く、ない？」

震えるルウナーの言葉でようやく視線の意味を知った。

アウラも同じことを言ったから。

「うん、もう痛くないよ。ずいぶん前の傷なんだ。もう8年くらい前になるかな？」

背中の中にも刻まれた大きな十字傷。未だおれがグリフィス家に捕われていたころ、リュシフェルの召喚の際につけられた傷だった。

「あ、だからね、あんまり背中の中の出る服は着られないんだ。あと、左手も。できれば隠したいな」

包帯を巻いたままの左手をひらひらと振ると、ルウナーはまるで泣きそうな顔をしておれを後ろからぎゅっと抱きしめた。

「ルウナー？」

「シドの気持ちじゃ嫌ほど分かるわ。もう心配で仕方ないわよ。こんな簡単に怪我して、痛々しい……見ている方は気が気じゃないのよ？」

「おれなんかより、アレイさんの方がずっとたくさん傷ついてるよ」
笑ってそう言うと、ルウナーはますます強くおれを抱きしめた。

「……バカ」

呟かれた言葉は、おれの心のどこかにずきんと響いた。

「もう全部、捨てたらいいのに。そんな風に傷つくくらいなら、全部捨てて逃げたらいいのに」

「そんなこと出来ないよ、ルウナー」

「知ってるわよ、そんなことっ」

悲鳴のような声だった。

「いつでも言つて。逃げたくなったら、私が、私たちがあなたを守るわ。一緒にケルトへ逃げることで出て出来る。みんなでもっと遠くへ行くことだって出来る。どこまでも連れて行つてあげるから…」

震えるほど強い意志を込めたルウナーの言葉は、おれの中に沁み込んできた。

おれはこの優しさを知っていた。

戦争に行く前に、グリモワール王国最後の王子、サン＝ミュレク
「グリモワールがおれにかけてくれた言葉と同じだった。

だけど、おれはその申し出を断った。

逃げるのが嫌だったわけじゃない。

ただおれは、守られるより守ることを選んだだけだ。

いまも、その気持ちは変わっていない。

「ありがとう、ルウナー。本当に嬉しい」

震えるルウナーの手に自分の手を重ねて。

「でもおれは決めたんだ。おれ自身の手でグリモワール王国を再建するつて。サンや、クラウドさんや、みんなが待っていてくれるから、必ず強くなって戻るつて誓ったんだ」

アレイさんと、二人で。

大丈夫。

きつとアレイさんとまた会える。

一度くじけそうになった心は、みんなが支えてくれたからまた前を向いて歩きだす。

「おれはさ、守って欲しいわけじゃないんだ。だからつて、見捨てられたら泣くけどね」

レメゲトンになるとき。

戦争のとき。

子供を産んだとき。

ライディーンを監獄から救い出したとき。

ヤコブが言った通り、おれは、いつも自分の持つ以上の力を借りているんなことを乗り越えてきたんだ。

「だから、支えてほしい。おれは何にも出来ないけど、背中に庇って守るんじゃないく、おれ自身に力が欲しい。戦う力がないから守られるんじゃないく、戦い方を教えてほしい。知らない事があるなら教えてほしい。守るんじゃないく、おれを助けて。何にも出来ないおれだけど、力を貸して」

守られることは望まない。

隣にいて、一番に支えてほしい——それは、おれがいつも願う事だった。

だからおれは、匿ってくれるサンではなく、一緒に戦うアレイさんを選んだ。

「お願いだよ、ルウナー。おれに、力を貸して」

「……分かってるわよ」

ルウナーの声が震えていた。

おれが泣かせてしまった罪悪感はもちろんあったのだけれど、それよりも、ルウナーがおれのことをこれだけ思ってくれているのが本当に嬉しかった。

少し遅れてやってきた衣裳係のリエッタが、顔を真っ赤にして逃げ出すまで、ルウナーはおれを抱きしめたままだった。

SECT・6 戦女神フレイア

あつという間にその日はやってきた。

舞台初日。

団員が駆けまわって宣伝したおかげか、珍しいケルトの歌劇団であるおかげか、演目が有名な歌劇『革命少女リオート』シス・アディーンの生涯』であるからか。

そのすべてが重なったのか、ミュルメクスで最も大きな劇場の客席は満員だった。

舞台袖から覗き見し、人の多さに息をのんだ。

「ルウナー、たくさんヒトがいるよ!」

「そうね。席はすべて埋まったらしいわよ。旅一座の公演としてはあり得ない事らしいわよ?」

「えー?! なんでそんなっ……」

「『踊り子』の候補がいるからですよ」

モーリがにこにこ笑いながら言った。

「今回、グレイスだけでなく、ルウナーも『踊り子』の審査に申し込んでいます。先日 of セフィラ乱入事件と同時期にセフィロト国からやってきた旅の一座、それも珍しいケルトの出身で、そこから『踊り子』候補が二人——この武道大会直前の時期に話題になるには十分だったようです。きっとこの中には、『踊り子』審査員も何名か紛れているはずですよ」

「言っておくけど、審査にはいくけれど私はただの付添いよ? グレイス一人で行かせたら、迷子にでもなりそうだったもの」

肩をすくめたルウナーは、すでにリオート・シス・アディーン of 衣装に身を包んでいる。

将軍のもとを訪れる最初のシーン、檻褸切れのように薄汚れた衣

装を纏っていても、ルウナーはとても奇麗だった。

むしろその汚れた衣装が眼差しに秘めた強さを際立たせているくらいだ。

「『踊り子』ってそんなにすごいのか？」

「はい。ディアブル大陸全土から集まる戦士が己の技を競う武道大会の前座ですよ？ リュケイオン全体から多くの候補者が集まります。地方ではすでに審査を終え、これからの選考に残っているのはすでに何千人もの候補の上に立つ方々ばかりです」

「え？　じゃあ、なんでおれとルウナーが入れたの？」

「枠が違うんですよ。グレイスとルウナーが参加するのはリュケイオン外からの参加者枠です。すでに書類審査も終わっております」

「書類審査？！」

いつの間に？

「そんなの、いったいいつ?!」

「あ？　そんなもん、俺様が適当に書いて出しといてやったヨ」

「ヤコブ！」

孤高の伝道師の声に振り向くと、そこに立っていたのは漆黒の神官服を着た神父ではない。

眩いばかりの純白の衣装に身を包んだ天使の姿だった。

「……ウリエル」

「何で言い直すんだヨ、黄金獅子の末裔」

「だって、そうしてると天使さんみたいだ」

「おいおい、その問いで、俺様にいったいどんな返答を期待してるだヨ」

肩をすくめたウリエルだったが、その美しさは隠しようもない。

軽く前髪をあげていて、いつも長い金の前髪の間から少し覗く程度だった深紅の瞳が露わになっている。すっきりとした目に収まる深紅の瞳は、驚くほど澄んだ紅玲玉ルビィと同じ色をしていた。眩いばかりの金髪も、純白の衣装によく似合っていた。

「よくお似合いです、ヤコブ神父」

にこにこと笑うモーリをちらりと見て、ヤコブは肩をすくめた。

「まったく、よく言ったもんだ、ホズの司祭。お前さんは結局、悪魔も天使も全部、この舞台に乗せちまいやがった。横から全部さらっていくのがお前さんの性分か？」

「私には商才などありません。ただ、人を見る眼だけは、自信があるんです」

「人とか言うな、白々しい」

ヤコブの口調は投げやりだったが、モーリに対して悪意を持っているわけではなかった。

単純にからかっているかのようなその様子を見て、ヤコブもおれやアレイさんのようにモーリに連れてこられて、丸めこまれたのだと知る。

フェリスは金髪を隠すように黒のターバンを巻いてロキの衣装にサヴァールⅡヴァイナー將軍役のグリックは重厚な鎧を纏った。

アウラとシドは客席から見守っているはずだ。

モーリがぱんぱん、と手を叩いた。

「さあ、始めますよ。みなさん、楽しみましょう」

全員の顔を見渡して。

「革命少女リオートⅡシスⅡアディーンの生涯の幕開けです」

場内が静まり返る。

ルウナーの凜とした声だけが響き渡っている。

主人公である革命少女リオートⅡの独白から始まるこの物語は、北の大国ケルトで昔、革命が起こった時の史実を元にした有名な物語だ。

農家の娘リオートⅡシスⅡアディーンは、戦女神フレイアの託宣を受け、革命軍の幹部サヴァールⅡヴァイナー將軍のもとへとはせ参じた。

そして、戦う事を躊躇う民衆に対して、強い言葉を投げかけ、戦いを鼓舞した。

ガリゾントの人数の大部分を占める楽隊が奏でる重厚な音楽に乗せて、リオートの声は高らかに響く。

「剣をとりましょう。国が我らを軽んずるのならば、我らはそれを覆さねばなりません」

「それはおかしい」

民衆の一人が声を上げる。

「もし戦女神フレイア様が我らを救ってくださると言つのならば、我らが剣をとる理由はない筈だ」

その言葉を聞いたリオートは、民衆に微笑む。

「戦女神フレイア様の名にかけて申します。フレイア様は、兵士が戦うからこそ、勝利を与え給うのです」

まるで戦女神のおわす天頂を指し示すかのように。

自らの進路を確かめるかのように。

ルウナーの演じるリオートは、ずっと舞台の端、木で組まれた大きな舞台装置の上を指した。

「私が行ったことで、神の命令によらないものは一つもありません。戦女神フレイア様は、常に私と共に」

凜と響くルウナーの声。

響き渡る管弦楽団。オーケストラ

出番だ。

おれは一步足を踏み出した。

舞台へと足を踏み入れた時、灯りに一瞬だけ目を細めた。

しかし、本当に一瞬だけだった。

おれの視界を埋めたのは、本当にたくさんのヒトたちの視線だった。

ああ、これはあの時と同じだ――

かつておれは、グリモワール王国のレメゲトンとして戦場に赴い

たことがある。戦場に到着して最初の日、おれは兵士たちの前で悪魔を召喚し、到着を報告した。

これは、その時と同じなのだ。

兵士たちの士気を上げるため、戦女神フレリアが姿を見せる必要があったのだ。

実際の歴史で、リオートⅡシスⅡアディーンが戦女神フレリアを召喚したか否か、というのは分からない。

しかし、この瞬間、おれの中ですべてが理解できた気がした。

おれはきつとこれから、リオートと同じ事をしようとしている。

たくさんの悪魔さんたちの力を借りて、多くのヒトを先導し、グリモワール王国を再建するのだ。

血を流す事を嫌い、革命を起こす事を躊躇うリオートの台詞が心の底から理解できるのは、きつとそのせいなんだろう。

それに気づいた時、おれの中で何かが変わった。

まるで剣舞をする時のように、自分の体の感覚が薄くなる。自分の体を操っているという感覚が遠くなっていく。

自然に一步を踏み出した。

深紅の紋様を描きこんだ純白の胸当てと、ティアラのように綺羅らかな素材で組んだ軽い兜。黒髪は兜に隠しておき、代わりに長い金色の髪が靡いた。

胸当てとお揃いのブーツのかかとがこつりと音を鳴らす。

腰に銀色の剣を携えたその姿は、戦女神フレリアのもの。

純白のマントを振り払うように大きく腕を振った。

ただそれだけで、観客が息をのんだのが分かった。

リオートの声が響き渡る。

「戦女神フレリア様は、我らと共に」

舞台上の民衆からわき上がる歓声。

おれは腰の剣をすらりと抜いた。

刃のついていない飾り剣は、光を受けて輝いた。

右手の剣をまっすぐに客席へと突き付ける。

舞台上の灯りが消え、装置の上にいる自分だけに光があたる。

「進め、リオート」

自分のものではない声が、自分の喉から響き渡った。

静まり返った会場に木霊する。

客席の最も後ろまで呼びかける。

「臆せぬ限り、守護しよう」

剣をゆっくりと一振り。

音もさせず鞘に収めた。

「お前が私を戦女神と呼ぶ限り」

舞台暗転。

SECT・7 終幕

舞台では、リオートが少しずつサヴァール・ヴァイナー將軍に徐々に惹かれていく場面が演じられていた。

幕を挟んだ向こう側から、遠い声が聞こえる。

練習の時に何度も聞いた台詞が繰り返されている。

舞台袖に戻ったおれを待っていたのはヤコブだった。

「なかなかそれらしく演^ヤつてたじゃねーか、黄金獅子の末裔。ああいうところは黄金獅子にそっくりだぜ」

おれと対になる白基調の衣装に身を包んだヤコブ——豊穰神フレイは赤い目を細めて笑った。

「おうごんしって、ご先祖様の事だよね」

「言っただろ？ お前さんの武器は何もかもを惹きつけて味方にしちまうところだ。黄金獅子もそうだった。だからあれだけの偉業を成し遂げたんだ」

「一度だけ会った事、あるよ。一瞬だったけど……」

黄泉の国の住人を呼びだすことのできる能力を持つ、第26番目の悪魔ブーネの力でこちらに呼び戻されたご先祖様と、おれは一度だけ対面した事がある。

少し癖の入った黒髪で、人好きしそうな雰囲気を持つ明るい青年だった。そして、おれとよく似た容姿をしていた。

「まあ、あいつもまた戻^{……}ってきてるけどな。縁かねえ、これは。不思議な事もあるもんだ。それともあいつの魂がそういう風に出来るのか」

「戻る？ 現世に？ 誰かが呼んだの？」

そう問うと、ヤコブは深紅の瞳を細めた。

「『転生』——って知ってるか、黄金獅子の末裔」

「あ、うん、知ってる。死んだ魂は、また新しい命としてこの世に返ってくるんだ」

「そうだ」

ヤコブは唇の端をあげ、笑った。

「さ、出番だ。行つてきな、『戦女神フレイア』」

はつとすると、リオートの独白が終わり、リオートが夢で戦女神フレイアと対面する場面に差し掛かっていた。

もう少しヤコブと話をしていたかったけれど、おれは遅れないよう、舞台袖に待機した。

リオートは強い。それは、身体的なものではなく、意思の強さだった。

人々を導く強さ。

何よりも、自分の迷いを口に出す強さがあった。

「本当に革命を推し進める事が、皆の為になるのでしょうか。多くの血を流し、多くの人の意思を踏みにじり、多くの人と敵対して革命を起こした後、本当に私たちは幸福になれるのでしょうか」
リオートのこの台詞に差し掛かると、いつもおれは胸の内を抉られるような感覚に陥る。

まるで、現在のおれ自身の叫びをそのまま言葉にしたかのような台詞。

將軍サヴァール「ヴァイナーはこれに答える。

「無論だ」

一瞬のためらいもなく、迷いもなく。

リオートの悩みすべてを見通し、受け止めたうえで、それでも前を向かせるために。

そう、いつも迷っているおれを導いてくれるアレイさんがいたように、サヴァール「ヴァイナー」將軍は革命少女リオートに道を指し示す。

「問うぞ、戦女神の愛娘リオート。もし革命をせず、現在の国の意思に従い、我々の意思が踏みつぶされることとなれば、それは国の意思を踏みつぶすことと何が違う？ 革命を起こさねば、我々の意思を踏みにじることとなるのだ」

「それは」

リオートが言葉を失うほどに強い言葉で。

「意思は人の数だけ存在する。そして、時に共有する。共有した意思は力となる。弾圧を繰り返す現在のやり方を壊すのは、我々革命軍全員の意思だ。そして民の多くも賛同するだろう。この国を、ケルトを愛するからこそ、ケルトの大地が、民が国の意思で蹂躪されていく様をただ見ていることはできぬ。もし、現在の政府が我らと違う意思を持つというのなら、こちらでも強き意思でもって反発するのが礼儀というものだ」

おれはいつも、このサヴァール・ヴァイナー將軍の言葉を胸に刻む。

そして、きらきらと輝く金色の瞳で導いてくれた育て親の言葉思い出すのだ。

自分が生まれたから、好きだから。そんな身勝手な理由で誰もが大切なものを選ぶのよ。そして大切にしたいものを守る心が二つ、相反するとき、それは衝突するしかない。そうしてまで守らなくてはいけないものも、この世には存在するのだ、と――。

もう一度、深く刻み込む。

おれはいつしか、リオートを自分に重ねていた。

人が傷つく事を厭いながらも戦では先頭に立ち、將軍や戦女神フレリア、そしてその兄の豊穰神フレイに支えられながら一歩ずつ進んでいく姿が、あと何年後かの自分の姿になればいいと思うようになっていた。

目の前では、この舞台の見せ場、サヴァール將軍とロキの剣舞が始まっていた。

フェリスが随分手加減しているのが見て取れる。

こんな事を言うと、サヴァール役のグリックに失礼かもしれないが、やはりシドのサヴァール＝ヴァイナー將軍を見てみたいと思うし、その時にロキ役をやるのはフェリスであってほしいと思う。

今度こそ本気の剣舞を見せてほしいと思う。

そして、その時、戦女神リオートを演じるおれの隣には、アレイさんがいればいい。

ごくごく自然にグリックの動きに合わせ、剣を跳ね飛ばされたフェリスは、舞台上で倒れ伏した。

舞台上に一人倒れたロキのもとには戦女神フレイアが現れる。

フレイアは、自らが選んだ少女リオートを惑わせたロキに、あくまで淡々と告げるのだ。

「ロキ」

劇場全体が静まり返り、自分の一挙手一投足にすべての視線が注がれているのを感じる。

「貴方に罰を与えます。これより先512年間を毒蛇の洞窟で過ごしなさい。そして自分の犯した罪をその身に刻むのです」

ああ、こうして呪詛の言葉を吐きながら闇へと消えていくロキにも、戦女神は心を砕いている。

この時、おれは確かに戦女神だった。

自分が自分でなくなる感覚。

とても不思議だった。

舞台へ向かって一歩踏み出すだけで、まるで自分の体が自分から離れていく感覚を身に受けながらおれは舞台の一段高い場所から、ルウナーが演じるリオートを見守った。

戦女神フレイアと豊穡神フレイを味方につけ、次々と敵軍を破っていく革命軍。

おれは、言ってしまえばただその場所に立っているだけだ。

戦女神フレイアとして、その場にいればいい。遥か天空から、リオートを励ませばいい。

叱咤し、激励し、現国王のもとへ向かえと言っただけだ。
でもきつと、戦女神フレリアは一人、心を痛めていた。
もちろん、戦女神が心の内をこぼす場面などない。それでも、もし史実を元にしたというこの物語が、かつて本当にあった出来事だとしたら。

リオートの魂を好ましく思い、契約し、導いた戦女神はきつと幼い少女が傷つくたびに自責の念に苛まれたに違いない。

ずっと悪魔を身近に接してきたおれには、とてもよくわかった。

彼らは、世間一般的に言うよりもずっと人間の情動に近い。永劫の時を得てきたが故、それを表に出す機会は少なくなってしまうているが。

旧王国体制を築いた国の中核人物たちを縛り上げ、勝利を経た革命軍が勝鬨を上げる。そして、ラストシーンへ向けて舞台上に人があふれる。

見守っている戦女神フレリアは豊穰神フレイに対して、初めて微笑みを見せるのだ。

舞台の中央で寄り添うリオートとサヴァール將軍。

リオートは一步前に進み出た。

「私は、農家の娘です。戦女神フレリアさまのお導きでこの場所へとやってきました。しかし、私は戦いを好みません。剣よりも旗のほうに四十倍も好きでした」

革命を成功させた少女の言葉に、観客が聞き入っていた。

「しかし、弾圧された人々が武器を手には抵抗を試みるのなら、私は喜んでその先頭に立ちましょう。それが私にしか出来ない、与えられた役割であるならば」

大きく両腕を広げたりリオートは、高らかに宣言した。

「掛替えの無い人生、それが、人間の持つ全てです。それを信じて、私は生きていき、私は死んでいきましよう。たとえそれが、辛く、苦しく、険しい道だとしても」

リオートは微笑み、最期の台詞を口にする。

「何かを成し遂げたいと思うならば、行動することです。そうすれば神も行動されるのですから。私が戦女神フレイアのもと、この革命を成し遂げたように」

瞬間、楽団が歓喜の音楽で劇場を包み込んだ。

ルウナーの歌声があふれだす。

美しい歌声は、革命の成功を祝う歓喜の歌。

歌が終わり、舞台のカーテンが下りてからも、劇場を包む拍手は止む事がなかった。

SECT・8 赤髪の少女

全身が痺れるような感覚がまだ残っていた。

終幕の瞬間、割れんばかりの拍手が劇場内に響き渡ったせいで、脳髓が揺さぶられた。

「グレイス！」

興奮した様子のルウナーが駆けてきて、そのままおれに抱きついた。

「すっごく奇麗だったわ！ 本物のフレイアさまかと思うくらいっ！」

「ルウナーもとっても奇麗だったよ」

とりあえず衣装脱いでいい？ と聞くと、すぐにお客さんの見送りに出るから駄目、と言われ、諦めた。

動きづらいのに、と唇を尖らせていると、ルウナーが笑う。

「ふふ、そうしているとフレイアの面影はないわね」

役者たちも楽団のみんなも、大道具などの裏方さんもみんなが互いの肩をたたき、舞台成功の喜びを分かち合っている。

「何はともあれ、これであなたの存在はかなりの速度で広がると思っわ。あれだけの存在感を見せつけられ、噂にならぬはずはないでしょう」

「存在感？ あった？」

首を傾げると、いつの間にか衣装をとくに脱いでいつもの神官服に戻っていたヤコブに頭を後ろから叩かれた。

「アホか。全員釘づけだったに決まってるだろ。全く、自覚がねえのがまた怖いところだぜ。この天然娼婦が」

と、思った瞬間、ヤコブの後ろから手が伸びてきて、ぴしゃりと額をはたいた。

「やめんか」

手の主はアウラだったようで、くわえ煙草の中年女医が姿を現した。

「あ、アウラ！ シドは？」

「すぐに宿へ送り返した。本来なら2時間もある芝居をあんな狭い席に座って見せること自体が体に悪い」

アウラはふう、と煙草の煙を吐き、唇の端に笑みを湛えて続けた。
「そうそう、涙を流さん勢いで感動しておったぞ、あの犬は。これは、帰ったら大変だろうな」

「……シド、怒ってない？」

そう聞くと、アウラは嘖き出した。

「何か怒られるような事をした覚えがあるのか？」

「ない、と思うけど、シドが怒るのがどんな時なのか、おれにはまだよく分かんないんだ」

それをきいたルウナーがくすくすと笑った。

「それを言ったら、またシドは怒るかもしれないわ」

「ええー？ 意味分かんないよ！」

シドのお説教スイッチが入るのがいったいいつなのか、おれには全く予想できないのだ。

まあ、予想できたからと言って回避できよう筈もないのだが。

「さあ、劇場の外でお客様をお送りするわよ。グレイス、黒髪が少し見えているから直して」

「はい」

おれは衣装を整え、シャンと背筋を伸ばした。

「そうそう、そうしてるとちゃんとフレイアに見えるぜ？」

「ヤコブはいいの？ もう衣装脱いじゃってるけど」

「当たり前だろ、俺様はお前さんと違ってあんま人目にふれんのはまずいんだヨ」

すつと柔らかな動きでおれの髪を整えたヤコブは、ぽん、とおれの背を押した。

「お前さんは違うだろ。ほら、せいぜい顔と名前を売ってこい。あ、

そうそう、お前さんの名前は『 그레이シャー 』 ロータス 』 で提出してあるからな。黄金獅子の名じゃねえから気をつけるよ?」

ルウナーと二人、手をとって劇場の出口へと向かった。

大きなホールになっている劇場の玄関口は、帰ろうとするお客さんたちでごった返していた。ここはミルメクスで最も大きな劇場だと言うが、最も権威ある劇場と言うわけではない。

戦争前に少しの間だけ住んでいた王都の屋敷のように豪華な飾りがあるわけではなく、どちらかというと造りは頑丈だが無骨な建物で、内装も音響以外の部分に配慮しているとは思えない、シンプルなものだった。

リウケイオン独特の細く複雑な路地の突き当たりには位置するこの劇場は、ほんの少しとはいえ、前庭が広場のようになっている。

その広場でお客さんたちを見送るためだ。

お客さんたちの前に出る直前、ヤコブが危ないから、と言って小道具の剣をおれの腰から抜き取った意味はすぐに分かった。

「あつ、リオート役のおねえちゃん!」

「フレイア! フレイア様だ!」

誰かが叫んだのをきっかけに、いっせいにおれとルウナーに視線が集まった。

と、次の瞬間。

目の前の群衆がいつペンにおれとルウナーに押し寄せてきた。

「!」

完全に油断していたおれは、為す術なくその中に飲み込まれる。刃が付いていないとはいえ、細長い剣を腰なんかにはさしていたら、誰かを傷つけてしまったかもしれない。

そんな勢いで人に飲み込まれたおれは例にもれず頭の中が真っ白になった。

「とっても奇麗でした!」

「勇ましくて、フレイアさまにぴったり！ 踊り子審査、応援します！」

おれと同じくらいの女性が。

「まだ公演はあるんだよね？ また来るよ！」

子供を連れたお父さんが。

皆一様に舞台の興奮冷めやらぬ様子で、舞台に上がっていた面々を取り囲んだ。

「最後の台詞で泣いちゃいました。あたし、明日も見にきます！」

「公演はいつまで？」

「フレイア様の出番は増えないの？」

さまざまな声が飛び交う中で、ルウナーは慣れた様子で一人一人に應對していく。

おれの両手も、渡された花束ですぐにいっぱいになってしまった。その花束の向こうに、ずっと現れた影があった。

その人物が現れたとたん、周囲の人々が場所を開けた。

大声をあげていた皆が静まり、ざわざわとしたざわめきに変わる。絶対的な存在感を放ちながらおれの目の前に現れたのは、まだ十代半ば過ぎと思われる少女だった。

目を見張るほど鮮やかな深紅の髪を高い位置で二つに括り、髪と同じ朱色に黒で複雑な紋様を刺繍したセパレートの上下を身に付けた少女は、おれを鋭い視線で射抜いた。両手にはその美少女然とした容姿に似合わぬ鋼のサックを装備している。

そして全身から立ち上る隠しきれない闘気は、紛れもなく戦士のものだった。

「……ミリア様だ」

誰かの声がぼつりと響いた。

おれが首を傾げていると、ルウナーがそつと横から囁いた。

「彼女は、3年連続で『踊り子』に選ばれているミリアリユコス」
「エリユトロンよ。彼女は今年も参加するはず。できることなら仲良くなっておきなさい」

「うん、分かった」

ルウナーにだけ聞こえるように返事をし、おれは花束を隣にいたグリックに押し付けた。

目の前の少女の背は、おれより少し低いだろうか。

しかし瞳に灯っていたのは強い光で、その光は独特の気配を放っていた。

さらに彼女には、瞳に灯る力の他に、よく知る気配の残滓があった。

その気配を、おれはよく知っていた。

「……マルコシアスさん」

悪魔の血の気配がした。

おれの中にも流れている、魔界の剣士の気配だ。

なぜ、この少女にその気配の残滓があるのだろうか？

心臓の鼓動が速くなる。

「フレイア役を演っていたのはお前か」

「そうだよ」

「名前は、何と言う？」

「ラック、と言いかけてヤコブの言葉を寸前で思い出す。」

「グレイシャー」ロータス」

「……」

赤髪の少女は、ほんの少し眉を動かした。

何かをいぶかしむ様な表情だった。

「グレイシャー、お前は『踊り子』の審査に参加すると聞いたが、本当か？」

「本当だよ。おれと、リオート役のルウナー。二人で参加するつもりなんだ。よろしくね！」

にこりと笑うと、彼女はふいと目を逸らした。

あれ、嫌われちゃった？

「ねえ、えーと、ミリア？」

「軽々しく私の名を呼ぶな、グレイシャー」

「おまえだつておれの事呼び捨てにしてんじゃん」

「私はいいんだ」

「何だその理屈。意味分かんないよ」

頬をふくらますと、ミリアも眉根を寄せ、不機嫌そうな表情になった。

どちらが引く気もない雰囲気、周囲を取り巻く人々の間で不安げな空気が流れた。

何しろ拳闘士の姿をした『踊り子』だという少女と、つい今しがた『戦女神フレイア』を演じていた役者がにらみ合っているのだ。

それも、どちらも『踊り子』候補。

「だいたいなんだよお前、アレ——」

そう言いかけた瞬間、顔の横からにゅっと手が伸びてきておれの口を塞いだ。

「はいそこまでだ、黄金獅子の末裔。お前さんもな」

おれの口を塞いだのと逆の手でミリアを指しながら。

豊穰神フレイ役の登場に、遠巻きに見ていた人々の間に再びざわめきが広がる。

「続きは『踊り子』の審査会場でいいだろ？ 組手だつてあんだし、好都合だ」

その言葉より先に、ミリアはヤコブの姿に目を見張った。

「フレイを演つたのはやっぱりお前だったのか……『ヤコブ』フアヌエル」

え、何、知り合い？

と聞きたいが口が塞がれているので声に出せない。

きっとヤコブはおれがそう聞きたいのだつてお見通しのはずだから、これはわざとだろう。

「俺様は豊穰神フレイだからな、戦女神の味方なんだヨ。悪いな、ミリア」

それを聞いたミリアの表情は、さらに不機嫌さを増した。

「……せいぜい、その女が最終審査まで残る事を期待するんだな」

ミリアはそう言い残して、踵を返した。
ヤコブに拘束されたままのおれを残して。

ミリアの後ろ姿が見えなくなり、お客さんたちもだいびひいて。
ようやくヤコブがおれの拘束を解いた瞬間、おれは叫んでいた。
「もう、何で止めたんだよ！」

「まあ、それはオトナの事情ってやつだ」
「おれはもう23だ！」

「俺様から見ればまだまだ子供だ」

「私から見ても子供よ。相手は3年連続『踊り子』のミリアリユコスⅡエリユトロン。軍神アレスの覚えも良いと聞くわ。そんな子を相手に喧嘩を売ってどうするの！　そうでなくともこんなところで『踊り子』候補が二人喧嘩なんてしたら目立つことこの上ないわよ？　これはかえってシドのお説教ね」

「え、ええー?!」

せつかくいい気分だったのに！

それも、ミリアにアレイさんの事を聞けなかった。
彼女からは、マルコシアスさんの気配だけでなく、居城に充満している軍神アレスの気配も同時に感じたというのに。

そんなことも全部お見通しであろうヤコブは、おれの頭にぼんと手を置いた。

「これからだ、これから。どうせ2週間もすれば嫌でも顔合わせんだから」

「そうだけどさあ」
「なんだか腑に落ちない。」

でも、とりあえずミリアには負けないようにしようと、心の底で誓った。

アレイさんを取り戻すためにも。

SECT・9 安堵

劇場は連日満員御礼、ルウナーとおれの知名度は一気に跳ね上がっていった。

特に主役のリオートを演じているルウナーの人気は凄まじく、もう迂闊に外を歩けないのだった。

おれはと言えば、普段黒髪でいるものだから、たいてい気づかない。ヤコブいわく、フレイア役を演じている時とはまったく雰囲気が違うから大丈夫だ、とのことだった。

それに、歌に踊りに、台詞も多いリオートの役と違って、フレイアはほとんど立っているだけ。確かに王族の役だけれど、それほど目立つもないだろう。

でも、そう言うところルウナーは思い切り首を横に振る。立っているだけで存在感を示すほうが、よっぽど大変なのだそうだ。

だから戦女神フレイアの役をやリたがる役者が少ないのだ、ともおれはフレイアの役が好きだったからあまり気にならないけれど。今回ばかりは誰かれ構わず連れてくるモーリに感謝ね、といったルウナーに生返事をするおれを見て、ヤコブが言った。

「本当にそれは天性だな。お前は黄金獅子にそっくりだよ。しかも、普段はその天性のカリスマってヤツを無意識で隠してやがる」

ヤコブは時折、おれのご先祖様の話をする。

その口調はとても親しげだ。ご先祖のゲートイアグリフィスは、天使の国から独立するために戦ったのだけれど、その頃はまだ敵国の天使ウリエルであつたはずのヤコブは、そんな事を感じさせもしなかった。

『孤高の伝道師』は悪魔の味方をして天界を追われた。もしかすると、その噂は本当なのかもしれない。

ある日、おれはヤコブに尋ねた。

「ねえ、ヤコブ。ヤコブはおれのご先祖様と仲良しだったの？」

「そんなわけねえだろ。俺様が誰か、知らないわけじゃあるまい？」

一瞬だけふいに4枚の翼を見せ、ヤコブは金色の前髪の内奥で笑う。

「でも、ご先祖様の話をするヤコブは楽しそうだ」

「俺様が詳しいのはお前さんの先祖だけじゃねえヨ。裏切り者のユダのことも、炎妖玉の事も、そいつが懸想した女剣士の事も、よく知ってる。それだけじゃねえ、当時、セフィロト国にいた神官たちの事も、当時の王のこともな」

「……ヤコブはその時、『まだ』ウリエルだったの？」

「そうかもな」

あ、もう駄目だ。

ヤコブから「そうかも」とか「そうなんじゃねえか」とかいう言葉が出てしまうと、その先は続かない。

彼が興味を失った証拠だ。

本当に、こんなときだけヤコブが天使である事を思い出す。

「ま、いいや。練習行ってくるよ！」

「おう、行つて来い」

踊り子審査は明日から。

必然的に、今日の晩は千秋楽となる。

中3日の休みを挟んだとはいえ、2週間演じ続けた舞台だ。名残惜しくないと言えはうそになるが、初日にマルコシアスの気配を携えて現れたミリアと会った瞬間から、おれの心はすでに軍神アレスの居城へと向いていた。

アレイさんに会いたい。

たとえばルウナーがいなかったら、ヤコブがおれを止めなかったら、シドが大怪我でベッドに縫い付けられていなかったら、フェリスが帰ってこなかったら。

何か一つでも欠けていたら、おれはとっくに軍神アレスの居城に力ずくで乗りこんでいただろう。

それをしなかったのは、たくさんの偶然が重なり、たくさんのヒトの想いを受け取ったからだ。

だから、おれに出来るのは『踊り子』の審査を突破して、軍神アレスのもとに向かう事だけだった。

『風燕^{ふうえん}』を元にした剣舞は、ほぼ完成に近づいていた。

音楽をイメージしながら、何種類もの型で舞う。

時に華やかに、時にしめやかに、時に切なく、美しく——そして、強く。

もう大丈夫。

おれは負けない。

アレイさんを迎えに行こう。

しかし、その日の夕方、驚くべき噂がおれの耳に飛び込んできた。

その噂を聞いたアウラは声を裏返した。

「軍神アレスと悪魔騎士アレイスター＝クロウリーの演武?！」

ほんの数刻で街中をめぐったのは、そんな触れ込みだった。

天使に滅ぼされた悪魔の国の騎士が、オリュンポスの軍神アレスに下った、というのはほんの少し前にミュルメクス中を駆け抜けた噂だ。

武道大会の前哨戦として、悪魔の国の使者とオリュンポスが対戦する。

話題性は十分だった。

「やっぱりアレイさんはあの場所にいるんだ！」

心がはやる。

「ですが何故、クロウリー伯爵はこちらに出向いてくださらないのでしょうか。グレイシャー＝ロータスの名はすでに街中で評判になっているというのに」

シドは首を傾げた。

「アレイさんはおれを待ってるんだ」

ふいにそんな確信がわき上がった。

何の根拠があるわけじゃない。

でも、もうそれ以外の理由が思い浮かばなかった。

おれはアレイさんに会いに行ってもいいんだ。

あの時、無情に閉じた扉の向こう、アレイさんがおれを拒絶したようだった。

だけど。

まるで緊張の糸が切れてしまったみたいだった。

「よかったあ……」

へにやへにや、とその場に崩れ落ちたおれに、慌てるシド。

「だ、大丈夫ですか？」

「うん、平気」

シドのベッドにもたれかかるようにして。

「ねえ、ヤコブ。いまから踊り子審査の名前『ラック・グリフィス』に変えちゃ、マズいかなあ？」

「やめとけ。『アレイスター・クロウリー』の名前が出てきた以上、その名前はと考えてもマズいだろ」

「むーん」

唇を尖らせて床に足を放り出した。

そのままごろり、と床に転がってしまふ。

「グレイス、はしたないからやめなさい」

ルウナーがたしなめたが、どうにも止められそうになかった。

ただこうしているだけで口元がゆるんでしまふ。

「えへへー」

「もう、起きなさい！」

「やあーだあー」

後ろでアウラが、これで23歳か、とため息をついた。

「どうしよ、ルウナー。すっごい嬉しい。アレイさんがおれの事を待っていてくれて、すっごく嬉しいんだ」

ぎゅうつと自分の体を抱きしめるようにして。

どうしようもなくあふれた歓喜に身を任せた。

「会いたい」

目を閉じて、愛しいヒトの姿を瞼の裏に描く。

胸の奥がずくずくと疼いた。

会えなかったその分、膨れ上がった感情が湧き出してくる。

「会いたいよお、アレイさん」

「……もう、本当に仕方ない子ね」

まるで優しい母のように、おれの頭を撫でたルウナーの手の感触が心地よかった。

床にごろりと転がったまま、えへへ、と相好を崩したおれを見て、ルウナーは困ったように笑い、肩をすくめた。

今なら、何でも出来そうな気がする。

誰にも負けない。

真っ直ぐにアレイさんの元まで。

立ち見で人にあふれた舞台は、大盛況のまま千秋楽を迎えた。

最後の最後まで革命少女リオートを演じ切ったルウナーに、賞賛の拍手が贈られた。

そして、役者の存在感自体が問われる難しい役だ、と言われていくらしい戦女神フレイアの役をやり切ったおれにも、同じように賞賛が届けられた。

何より、戦女神という役どころは、『踊り子』を目指すのにぴったりだったらしい。

革命少女を演じたりオートと、人気自体は二分していたのだけけど、『踊り子』審査で応援すると言ってくれるヒトたちは、おれの方がずっと多かった。

とっても嬉しい事だけれど、とても不思議でもあった。

『踊り子』の審査は、明日から始まる。

SECT・10 軍神アレス

審査当日、おれとルウナーは付き添いにモーリとフェリスを伴って、軍神アレスの居城へと向かった。

フェリスがついていくことに最後までシドは反対したのだが、最悪の事態——たとえば、軍神アレスが敵に回るとか——を考えた場合、フェリスが味方をしてくれるのが最も心強い。

無論、フェリスが味方になるという保証がないとシドは強く主張したが、ヤコブがなんだかんだと理屈をつけてシドを説得していた。最後に、俺様はいかねえけどな、と言ったところを見ると、自分の役割をフェリスに押し付けたかっただけなのだろう。確かにヤコブがついていてくれると安心感が全く違うけれど、コインをおれが預かっているとはいえ、悪魔と契約しているフェリスがついてきてくれるのなら安心できる。

そうしていつものようにラフな格好で出かけようとしたおれだったのだが、衣裳係のリエッタに止められてしまった。

縫いものと刺繍が趣味のリエッタは、公演の衣装を直す合間、おれのために衣装を繕ってくれていたのだ。

いつものおれの服に近い、黒のショートパンツと黒のチューブトップ。黒に銀色の刺繍をした柔らかな布がまるでマントを広げたように腰のあたりで翻る。それをとめている大きなリボン、後ろ腰のあたりで蝶結びに。背中では隠したいというおれの要望に合うよう、丈の短い上着を縫ってくれた。上着のデザインは、どこかグリモワール王国騎士団の制服に似ていた。

もしかすると、元漆黒星騎士団のシドが助言したのかもしれない。両手には、銀色の刺繍をしたオーブンフィンガーの長手袋、その上から手の甲だけを隠す籠手を付けた。

両腰にはいつものショートソードを装備したが、この衣装にはし

つくりと似合っていた。

全身を黒でまとめたのに、どこか華やかで優雅。

何より、動きやすい。

隣を歩くルウナーは、ひらひらと翻る淡い水色のワンピース。とてもシンプルだけれど、立ち姿それ自体が完璧なルウナーはそのくらいがいいのかもしれない。髪はアップにして、濃い色のジャケットが全体を引き締めている。

ケルトの民族衣装に身を包んだモーリと、黒ニットのフェリスが、着き従うように並んでいた。

目の前には、軍神アレスの居城。

大きな白い柱が取り巻く円柱状の建物には、柱に負けず劣らず見上げるような大きな扉がある。

前回は、この扉に阻まれた。

あの時の絶望感が蘇りそうになって、思わず身震いした。

でも、今は会いたいという気持ちの方が強い。

真っ直ぐに扉を見据えた。

今日が踊り子試験の初日だと分かっているせいだろう。

ここへ来るまでも、この扉の前も、見物らしき人々にあふれている。

普段は閑散としている街の細路地でさえ、左右の家の窓から見下ろす人影が絶えなかった。

今も、劇場まで足を運び、応援してくれるといったヒトたちが少し遠巻きに見守ってくれている。ひらひら、と手を振ると、嬉しそうに手を振り返してくれた。

入口には、衛兵さんが二人立っており、踊り子試験に参加する旨を伝えると、横の小さな扉に向かって何かを囁いた。

そして、閉ざされた扉が開かれた。

中をのぞける程度ではなく、自分の身長は何倍もなる高さの扉が歓迎するように大きく動くのだ。

それだけでぞくぞくした。

扉が開いた瞬間、全身を襲った軍神アレスの気配に息をのんだ。
ここは軍神アレスの『場』なんだ。

周囲から歓声が上がる。

「がんばれよ！」

「俺たちがついてるぞ！」

ありがとう、と叫び返し、扉の向こうを見据えた。

「行きましょう、グレイス。遅れてしまうわ」

ルウナーに促され、ようやく一歩、踏み出した。

アレイさんのもとへと向かうため。

薄暗い通路を真っ直ぐに歩いていくと、急にぱっと目の前が開けた。

「う……わぁ」

思わず感嘆が漏れる。

目の前に広がったのは、黒土をびっちり敷き詰めた闘技場だった。

おれの身長の数倍はあろうかという壁が円形にぐるりと周囲を取り囲む。壁は太陽の光を反射して純白に輝き、壁の向こうに整然と並ぶ客席に陽炎をもたらした。

ずっと外から眺めていた軍神アレスの居城に入るのは初めてだった。

ここで、太古から戦士たちがその腕を競ってきたのだと思うと、それだけでぞくぞくした。

気分が高揚する。

今にも剣を抜きはなちくなるような不思議な感覚。

が、目の前に現れた影に、現実へと引き戻された。

「よ、ミリア」

現れた赤髪の少女に笑いかけると、無然とした表情をされてしまった。

「何を嬉しそうな顔をしている」

「え、だってさ、軍神アレスの居城に入ったのって初めてなんだ！
しかも闘技場に入れるなんて思ってもなかったし。すごいな、こ
の場所」

舞台と同じ、こちらを四方から見下ろしている客席を見渡した。

「此処で戦うかと思うと、わくわくする」

それを聞いたミリアは、眉間にしわを寄せた。

「わくわくする、だと？」

「うん」

腰に差したショートソードに手を当て、目を閉じる。

視覚情報がなくなると、聴覚と、それ以外の感覚が鋭敏になる。

軍神アレスの気配が充満する中に、微かな悪魔の気配の残滓が感
じ取れた。

「それに、ここにはおれの大切なヒトがいるんだ。だから、迎えに
来た」

最初に会った時、ミリアから感じた気配は、この場所と同じだ。

「ねえ、ミリア。もしかしてミリアはここに住んでるの？」

「……なぜそう思う？」

「最初に会った時……あ、舞台初日の話だよ。あの日、ミリアから
この場所と同じ気配がした」

「気配だと？」

「『軍神アレス』の気配だよ」

それを聞いたミリアは、目を細めた。

「この間はヤコブに邪魔されたから聞けなかったから、もう一回聞
くよ」

少し見下ろす位置にある、深紅の瞳を真っ直ぐに見つめて、おれ
は尋ねた。

「アレイさんはここにいてるんでしょ？」

その問いに、ミリアの返答はなかった。

代わりに彼女はおれに近づき、耳元で呟いた。

「お前が本当に『踊り子』になれたら答えてやるよ」

一次審査に参加する『踊り子』候補は全部で50人。周りを見渡しても奇麗なヒトばかりで、思わずきよろきよろしてしまった。

それも、奇麗なだけじゃない。

誰もかれもが腰や背に武器を負っていた。

「普通の踊り子は私くらいね……予想してた事だけど」
ルウナーが肩をすくめた。

「やっぱりみんな、強いのかな？」

「そうね。それなりの訓練をしていると思うわ」

武道の心得があるのはなんとなくわかる。

が、いつもアレいさんやマルコシアスさんとばかり組手をしてい
るせいだろうか。とても、負ける気はしなかった。

ただ一人、ミリアだけを除いて。

「一番強そうなのはミリアだな」

そう言うのと、後ろに控えていたフェリスが同意した。

「ま、そーだろうな。この中で 그레이ス と張り合えるかどうかっ
つたらあの娘くらいだろ」

頷き合っていると、ルウナーは首を傾げた。

「やっぱり分かるの？ 誰が強い、とか、勝てそう、とか」

「そりゃあね。こう見えて 그레이ス、めちゃくちゃ強いよ。あの戦
争で前線に立つて、ティファレットを倒したのもディファンクタス牢
獄を壊滅させたのも、ダテじゃないんだぜ？ ホントならこんなと
こで『踊り子』しようとしてる方が間違い。こんなレベルどころか
クラス違いの候補が混じってるなんて、審査と関係ないオレっちで
も同情しちゃうよ」

「え、じゃあ、あのミリアリュコスⅡエリクトロンはその 그레이ス
と同じくらい強いって……」

「そうだねえ、3年連続で選ばれたただの『踊り子』ってわけには

いかないかもしんないけど」

フェリスの言葉を聞きながら、おれはミリアの気配に集中していた。

この場の気配と、悪魔の気配。

それから、居城を取り巻く軍神アレスの力の流れ――

「もうグレイスはほとんど答えに辿り着いてるみたいだけど？」

「んー、うん、まあね」

あの気配は、『本物』だ。

残滓なんかじゃない。場を引き連れているだけでもない。

どうしてこんなにも力を分散させているのかは分からないけれど。

「何？ どういうこと？」

首を傾げるルウナーに答えを教える前に、大きな太鼓の音が響き渡った。

はつとして客席の音の方向を見ると、赤髪の長身男性が客席から見下ろしていた。

深紅の衣に身を包み、軍神アレスの気配を纏ったその男性は、片側だけを三つ編みにたらし、無表情で『踊り子』候補たちを見渡した。

そして、その背後に佇んでいたのは。

「……アレイさん」

あれほど恋い焦がれた、大切なヒトの姿だった。

隣のルウナーが息を呑み、フェリスは肩をすくめ、モーリは優しく微笑んだ。

どうしよう。

息がうまくできない。

喉が張り付いたみたいに声が出ない。

客席に立ったのは3人。

まずは、軍神アレスの気配を最も濃く纏った赤髪の男性。顔の左側の髪を伸ばし、三つ編みにしてたらしめている。すっきりとした目鼻立ちが特徴の典型的な東方人の顔立ちで、無表情で、唇は真一文字に結ばれている。かなり長身で、立ち姿だけでも相当に修練を積んだ剣士だと言う事が分かる。炎のように紅い、東方の衣装を模した軍服を纏っていた。アシンメトリー左右非対称のマントがざわりと風に翻った。

そして二人目、こちらはわかりやすいリユケイオンの民だ。立派な体躯、彫の深い顔立ちに波打つ茶髪。絵画に描かれてもおかしくないような均整のとれた見栄えのする戦士だ。このヒトは、きつと剣よりも大槍が似合う。

それから——ずっと思い描いていたヒト。

彼に一番似合う黒の騎士服を着ていた。切れ長の目も端正な顔立ちも、不機嫌そうな表情も、最後に別れた時から変わっていない。

堂々たる戦士が3人並ぶ様は、圧巻だった。

このまま、演劇の一場面にでもなりそうな雰囲気。

でもおれには、他の『踊り子』候補のようにそんな場面を楽しむ余裕などなかった。

「……アレイさん」

ほんの少しだけ痩せただろうか。目の下に疲労の色が濃かった。

太陽のもと、明るい紫水晶が真っ直ぐにこちらに向けられていた。またひどい怪我をしたに違いない。

胸のあたりがきゅうつと苦しくなる。

思わず一步、踏み出していた。

じわりと目の端に熱いしずくが浮かぶ。

やっと、会えた。

——必ず生きて、リユケイオンで。

会えたよ。

やっと、会えたよ。

「グレイス、駄目よ」

ルウナーがそう言っておれの腕をひかなかったら、情動のままそのままだに駆けだしていただろう。

はっと我に返る。

「今行ったら、追い出されてしまうわ」

「オレっちは別にいいけど？ グレイスがコイン貸してくれたら、軍神アレスだって相手にするよ」

フェリスがおれの首にかかったコインを指に引っかけた。

黒ニツトの下のセルリアンの瞳が近づく。

「うっん、大丈夫。アレイさんがあの場所にいるだけで、大丈夫」
懸命に心を落ち着けた。

踊りだしそうな歓喜がおれの中を駆け巡っている。

今なら、何だって出来そうだ。

再び見上げれば、アレイさんの眉間にはいつものように皺が寄っていた。

何か不機嫌になるようなことでもあっただろうか？

ようやく『戻ってきた』感じがした。

ああ、やっぱりおれはアレイさんがいないとだめなんだ。

「いま、行くよ」

真っ直ぐに見つめて、呟いた。

声が届いたかは分からなかったけれど、アレイさんは少しだけ微笑んでいるように見えた。

「もうこれで負けられないわね」

「うん。負けないよ」

負ける気もない。

アメジスト

紫水晶の瞳を見た時から、おれの心はもうあの場所にあった。

「一次審査が全員での舞踏、これはこのままこの場所で行われるわ。曲目は……言っても分からないわね。明るい曲と、寂しい曲と、力強い舞踏曲の3つよ」

おれがアレイさんに見とれてぼうっとしている間に、説明はすべて終わってしまったらしい。

ルウナーたちが一緒にいてくれてよかった。

心の底からそう思う。

「それから、場所を移動して数名ずつの面接試験、最後に簡単な組手があるわ。今日の試験はそこまで。試験が終わってすぐ、二次審査に進む5名の発表があるわ」

「長くかかりそうだね」

「ええ。すべて終わるころには夜になっていると思うわ」

「そんなにかかるの?!」

「そうよ。二次審査は2日後。その時に『踊り子』の3人が決定するの。それからもう3・4日もすれば本番よ」

「そうなんだ」

あと1週間もすれば武道大会が始まる。

この闘技場で、ディアブル大陸全土の戦士が腕を競う。本当はその大会に参加してみたかった。

最初は、ねえちゃんとアレイさんの隣にいたために剣をとった。

ブラックルビー

そして、漆黒星騎士団で鍛錬を積み、大切なモノを守る為に腕を磨き、今は建国の力を手に入れるため、日々精進している。

そうした中で、『戦い』を嫌うおれは純粹に『試合』が好きだっ

たから。

自らの持つ力をすべて使って、相手と技を競うことが楽しかった。でも、それが敵わないというのなら。

「……おれ、ここで『踊り子』になりたい」

唐突に、そう思った。

軍神アレスの気配が充満する闘技場の真ん中で、たくさんのヒトに見守られて、精霊に捧げる踊りを。

戦士たちの為に舞う『踊り子』。

せめておれは、戦うモノたちに祈りを捧げよう。

「武道大会に参加するヒトたちの為に、踊りたいな」

ここまできて初めておれは『踊り』に目を向けた。

ただアレいさんに会うための手段だった剣舞は、いまやおれの中で大きな居場所を得ていた。

今なら、自分の歌と踊りで、戦争で疲弊した人々を元気にしたいと言ったルウナーの気持ちがよくわかる。

戦女神フレイアが姿を見せる事で革命軍が沸き立ったように、もしかすると、おれの力で誰かを勇気づける事が出来るのかもしれない。

ただのうぬぼれかもしれないけれど。

「大丈夫ですよ」

最初からおれに『踊り子』を見出していた歌劇団の座長は、眼鏡の奥の優しい目を細めて笑った。

「貴方はきつと『踊り子』になれます」

モーリはこうなる事が分かっていたのかな？

あ、駄目だ。ヤコブと話すようになってから、ヒトを疑う事を覚えてしまった。

心を改めて、モーリに笑い返した。

「ありがとう。きつと選ばれて見せるよ！」

その時、『踊り子』候補集合の声がかかった。

はっと見ると、アレいさんはこちらにくるりと背を向けて去って

いくところだった。

その背中に駆け寄りたいた衝動をかるうじて抑える。

「行きましよう、グレイス」

「うん」

ルウナーに促され、全員が集合する入り口付近へと向かった。

一次審査の第一試験はとくに何の規定もないのだという。

3つの曲が流れるので——曲名も聞いたけれど、結局おれの知らない曲だったから忘れてしまった——好きに体を動かしていい、と言われた。

ルウナーが明るい曲と、寂しい曲と、力強い舞曲曲と言っていたから、それで十分だ。

客席に、楽隊が入場してきた。

ぼおつとそれを見上げていると、周りの候補たちは準備運動を始めている。

ミリアはおれから一番遠いところにいた。

淡い色の髪が多いリユケイオンで、赤の髪はとても目立つ。

『踊り子』になれたら答えてやるよ、といったミリアは、アレイさんを見ても眉一つ動かさなかった。

絶対にミリアは何か事情を知っているに違いないんだ。

しかしその時、客席の楽隊が一曲目の演奏を開始し、おれは思考を止めた。

SECT・12 起きて見る夢

ごく稀に、夢を見る事がある。

眠っている時じゃなく、起きている時に見る夢だ。

『幻想』とか『妄想』とかいう言葉でもいい。

絶対に、現実にはならないと分かっているから『夢』と呼ぶ。

たとえばおれが、グリフィス家の人間じゃなかったら。戦争なんてなかったら。

おれはいつたい、どんな風に暮らしていたんだろう、って。

いくつも選択肢はあっただろう。優しい両親に育てられ、小さな街の片隅で酒場を開いて、子供を育てながら穏やかに時を重ねていったかもしれない。結局は戦いを求めて騎士の道を選んでいたかもしれない。ルウナーのように歌劇団で踊り子になっていたかもしれない。

剣で舞うおれは、まさにそれだった。

一つの可能性。

夢のうちの、一つ。

まるでずっと昔からこうなるはずだったように自然だった。

そこに思考は存在せず、おれでありながらおれではない誰かが体を支配している感覚。

驚くほどしつくりと馴染む動きに、おれは戸惑わなかった。

曲が終わり、着地して剣を収める時に、感覚はようやくおれの元に戻ってくる。

もし悪魔がいなかったら、もしおれがリユシフェルと契約しなかったら、もしねえちゃんと、アレイさんと出会えていなかったら——すべては夢。

刹那の夢。

だからおれは、剣をとり、舞うのかもしれない。

第一試験を終え、次は面接。

経歴を聞かれて困ったが、一緒に面接を受けたルウナーが代わりに全部答えてくれた。

どうも、戦争で地位を失った旧グリモワール貴族の娘、という事になっているらしい。確かにグリフィス家はグリモワールの貴族だし、おれがグリフィスの末裔であることにも間違いはないんだけれど……どこか違っていているような気がするのは気のせいなんだろうか？書類を作ったのがヤコブと言うが、適当に脚色して書いたってのは嘘じゃない。

セフィロト国と小競り合いが在った時期、繊細な問題であるからとルウナーが適当にごまかして、面接は終了した。

最後の試験、組手が待っている。

しかし、ミリアとおれは組み合わせて貰えず、相手をしたのはおれやルウナーと同じ、旅の一座の曲芸師だと言う女性だった。

褐色の肌に映える派手な布を何枚もつなぎ合わせた衣装に、細長く鋭いシャムシール。

海の向こう、クルアーンからやってきたという彼女は、鋭いまなざしに敵意を乗せていた。

「北の大国ケルトの一座だそうね。つい先日やってきたというのに、ここまで名を挙げたことには敬意を表するわ」

「どうもありがとう」

ほめられているような気がするので、頭を下げる。

剣を一本だけ抜いて構えると、彼女は首を傾げた。

「貴方は両手剣かしら？」

「そうだよ」

「何故一本しか抜かないの？」

問われておれは、相手の武器を指さす。

「だって、シャムシールを相手にする時は、一本で戦った方が奇麗に見えるじゃん」

当たり前のことを言っただつたのだが、彼女は眉間にしわを寄せた。

細長く反った刀は大きな円で動くから、2本のショートソードをひらひらと動かして視点を分散させるより、小さな動きでかわすほうが映える。

「慣れぬ片手剣で、私に負かされるという選択肢はないのか？」

「負けないよ」

「いまなら誰にも負けない。」

「大した自信だ」

彼女は、シヤムシールを抜き、上体を大きく逸らすように掲げた。

「いざ、お手合わせ願おう」

「お願いします」

見合う時の心地よい感覚に包まれながら、おれは剣を抜いた。

審査を終え、再び全員が闘技場へ戻ってきた時には、もう辺りが薄暗くなっていた。

別の場所で行われる面接と組手の間、待っていてくれたモーリが出迎えてくれた。

「お疲れ様です、 그레이ス。どうでしたか？」

「んー、なんだかよくわかんなかったよ」

最初の踊りは何も考えなかったし、面接は意味のわからない事を聞かれてルウナーに全部任せていたし、組手の相手は弱くて手加減するのが難しかった。

「大丈夫よ、 그레이スは。面接はまあ……ひやひやしたけれど試験の間もずっと一緒だったルウナーが肩をすくめる。」

「そう言えば、フェリスは？」

「途中で退屈してどこかへ行ってしまいましたよ。その壁を上っていましたから、中にいるのでは？」

「まったく、見つかったらどうするのよ」

ルウナーのため息。

そこへかぶさるように、フェリスが降ってきた。

「フェリス！ まったく、何処へ行っていたのよ?!」

「いーじゃん、ちよっとくらい」

悪びれもせず、ひらひらと手を振るフェリス。

「それより、ほら、発表だよ?」

フェリスが指差した先には、最初に姿を見せた赤髪の男が立っていた。

その隣には、もうアレイさんがいなかった。

一瞬にして興味を失ったおれに気づいたのか、ルウナーが釘をさす。

「ほら、決勝に残る5人が発表されるわよ。ちゃんと聞いてなさい！ 第一、あの赤髪の男性が貴方の会いたがっていた軍神アレスだと言っじゃない。ウオルジェンガさんが見つかったから、もう興味が無いのは分かるけれど」

ルウナーの言葉に、おれは思わず返答する。

「え? あれ、軍神アレスじゃないよ?」

「何を言ってるの。最初に紹介していたでしょう……貴方は聞いていなかったかも知れないけれど」

「違うよ。確かに気配は濃いけど、違う。あのヒトは軍神アレスじゃない」

「どういうこと?」

眉を寄せたルウナーに返答する前に、大音量の太鼓が響き渡った。赤髪の男の隣に控えていた、茶髪の大男が前に進み出る。

「本日の踊り子試験の結果を発表する」

候補たちの間に緊張が走った。

おれは、何故かその時、ミリアの姿を探していた。

薄暗い中、ミリアの深紅の髪はよく目立っている。おれが見ているのに気づいたのか、ミリアの深紅の瞳がこちらを貫く。

あいつもおれがラック・グリフィスだと知っている。

アレイさんがここにいるのも知っている。

でも、おれもあいつが……

「発表は以上！」

大男の大声で分断された。

あ、やべ、また全然聞いてなかった。

「グレイス、聞いてなかったでしょう？」

ルウナーの声が怖い。

「あ、あのさ、どうだった……？」

びくびくしながら尋ねると、ルウナーは大きなため息と共に答えた。

「合格よ、グレイス。明日、また同じ時間にここへ集合だとおっしゃっていたわ」

「あ、そうなの？ ルウナーは？」

「残念だけど、私は今日でおしまい」

「えっ？ なんで？！」

「何でって、私は第3試験の組手を棄権してるもの。合格するはずがないわ」

肩をすくめたルウナー。

じゃあ、明日は一人なのか。

「あ、ミリアは？ 合格？」

「ええ、もちろん。明日も一緒だけど、喧嘩しちゃだめよ？」

「はい」

落胆する踊り子候補の群衆の向こうにミリアの姿を探したが、既に彼女は見当たらなかった。

「なんでミリアは踊り子審査に参加しているのかな……？」

唐突にそう聞くと、ルウナーはため息で答える。

「何故って、ミルメクスに住む女の子なら踊り子にあこがれるのが普通でしょう？」

「違うよ。だって、ミリアは、軍神アレスじゃん」

おれの言葉に、その場にいた全員が凍りついた。

SECT・13 ミリア

「……え？ 軍神アレス？ ミリアが？」

大きく目を見開いたルウナーが茫然と呟いた。

「うん、そうだよ」

おれがヒト以外の気配を読み間違えるはずはない。

悪魔のコインの気配を、天使の刻印の気配を探ることが出来るように、ミリアから感じるのもヒトとは違う何かの気配だった。

おそらくそれは、精霊の気配なのだろう。

オリュンポスだけが召喚できるという、12の精霊たち。

「じゃあ、あの赤髪の人？ ウォルジェンガさんと一緒に出てきた、あの人」

「んー、分かんない。でももし、あの人が軍神アレスって事になってるんだとしたら、ミリアが『力』を与えて、軍神アレスのフリをさせてるんじゃないけど。でも——」

言いかけた俺を、モーリがとめた。

「話はそこまでです、グレイス。話を続けるにしても、場所を変えませんか？ ここは少し目立ちます」

はっと辺りを見れば、踊り子候補だった少女たちの視線がこちらに向いている。

おれたちは、そそくさと闘技場を後にした。

非常に居心地の悪い空気が部屋を充たしていた。

宿の一室、いつものようにシドが休む部屋に全員が集まっているというのに、誰も口を開かない。開けない、と言った方が正しいのだろうか。

おれはどうやら言っではいけない事を言ってしまったらしい。たまにあることなただけけど、おれはヒトより少し目がよくて、

ヒトより少し耳がいいから、気づいてはいけない事に気づいてしま
うことが多い。そしてよく考えずにそれを口にして、周りのヒトを
困らせるのだ。

だからお前は阿呆の鳥頭なんだ、というアレイさんの台詞が聞こ
えたような気がしておれはため息をついた。

偉そうに腕を組んで入口のドア付近に立ったヤコブは、金髪の間
から赤眼を覗かせながらおれに聞いた。

「ミリアが軍神アレスだってことにいつ気づいた？ 黄金獅子の末
裔」

「確信したのは闘技場に入った時だけど……んー、今考えると最初
に会った時から分かってた気がするよ」

隠そうとしてはいたけれど、ミリアの全身から立ち上る精霊の気
配は消せやしなかった。

それだけでなく、結界を張って閉じ込めていたアレイさんの――
マルコシアスさんの気配さえ微かに残っていた。

「武道大会の前の『軍神アレス』と『悪魔騎士アレイスター』クロ
ウリー』の演武は、いったい誰と誰がやるんだろう？ ミリアが戦
うの？ でも、ミリアは踊り子なんだよね……？」

分からないことだらけだ。

「もしかして、アレイさんを捕まえたのはミリアなのかな？ ミリ
アがアレイさんを結界の中に閉じ込めたの？ 何でそんな事したの
？ おれを追い返したのは何で？」

たくさん疑問をいっぺんに口に出すと、余計に分からなくなっ
た。

「そんな事、本人に聞け」

「……そうだね」

ミリアは、おれが踊り子になったら教えてやる、って言ってた。

じゃあおれは、その言葉通り明日の踊り子審査で合格すればいい。

「ここで話しても仕方がないわ。明日も早いし、もう休みましよう」
ルウナーがそう言っ、その場はお開きになった。

部屋を出る時、おれは真っ直ぐにヤコブを見据えた。

金髪の間から覗く赤眼でおれを見たヤコブは、おれの言いたいことだつてすでに分かっているに違いない。

「そんな目で見るんじゃないやねえヨ、黄金獅子の末裔」

「だつてヤコブは知つてたじゃん。ミリアが軍神アレスだつて」

何で黙つてたんだよ、とは言わないけれど。

何もかも知りながら何一つ口にしないこの天使の気まぐれにはもう慣れっこだ。

べーっと舌を出して部屋を出ると、ルウナーが呆れたようにこちらを見ていた。

「ラックは本当にいつも元気ね。時折、うらやましくなるわ」

「そう？」

ととん、と拍子^{リズム}を取りながら部屋へ向かう。

自然に身体が踊りだす。

階段の手すりに飛び乗ったところでルウナーが止めた。

「危ないわよ、やめなさい！」

「だいじょうぶだよ」

手摺を踏み台にとん、と跳ぶ。

くるくると床に着地。

「おれは負けない！」

まったくもう、と肩をすくめたルウナーは困ったように笑つていた。

翌朝、おれは昨日と同じように軍神アレスの居城の前に立っていた。

昨日は4人で通つた扉をくぐるのは、今日はおれ一人だ。

お見送りに来てくれたルウナーとモーリに手を振つて、おれは再び闘技場へと足を踏み入れた。軍神アレスの力が満ちる、この場所へ。

迎えたのは、赤髪を二つに括った少女だった。

「おはよう、ミリア」

挨拶をしたが、ぷいっと顔をそむけられた。

仕方がないので顔を向けた方向に移動して、もう一度あいさつ。

「おはよう！」

無視。

むーん、と口を尖らせていると、ふいに銅鑼の音が響き渡った。

発表された試験の内容は、昨日とほとんど同じだった。組手と演武。

試験官に指示され、おれは、ようやく待ち望んだ相手と対峙した。

「剣を抜け、グレイシャー」

「言われなくとも」

おれより少し小柄なミリアは、やはり拳闘士らしい。

太陽は天頂を目指し、陽炎が立つほどの陽気が包む。まるでこの場に、おれとミリアしかないかのようになり、二人、闘技場の真ん中に陣取った。おれたちを取り囲む客席は空っぽだったけれど、逃げ場をふさぐように高く積まれた観客席のせいで、たくさんのヒトに見られているような感覚に陥った。

本当の武道大会の日には、この客席がすべてヒトで埋まるんだろう。

武道大会には出られないおれが、唯一この場で戦えるチャンスだ。おれにとって、もう『踊り子』試験なんてどうでもよくなっていた。

高い位置に括った赤髪が風に揺れた。彼女の全身を包むのは、まぎれもない戦士の闘気だった。この闘技場にひどく相応しいその姿は、軍神アレスそのものだ。

なぜ彼女は、軍神アレスであることを偽って『踊り子』試験に臨んでいるんだ？

疑問を振り払うようにおれは両腰のショートソードを抜き放った。金属のこすれる音がして、刃は太陽の光を反射した。ゆっくりと効き足を後ろへ引き、体勢を低く構える。

昨日の試験で相手にした踊り子さんとは全く違う。これは、踊りじゃなく、組手でもない、本気の演武だ。人に魅_ミせるための戦いだ。ずっと緩やかに吹き抜けていたほんの一瞬、風が、止んだ。それが合図。

ミリアは予備動作なしで地を蹴り、一気に間合いを詰めた。次の瞬間には鋼で固められた拳が迫ってくる。

体を捻_ほるようにして避けると、漆黒の上着の端を掠め取られ、糸が解_ほれて弾けた。

なんて威力だ！

とても筋力などなさそうな細腕から繰り出される攻撃は、とても10代半ばの少女のモノとは思えない。

ショートソードを手にしたまま、腕の付け根を弾くようにして方向を反らした。

そのまま逆肘で顔の側面を狙ったが、逆に捕えられる。しまった、と思った時にはもう遅い。

おれの体は軽々と宙に投げ飛ばされていた。

太陽の光が直接目に刺さり、思わず一瞬目を閉じた。

無理やり体勢を戻し、地面に手を付きながらも着地。距離を置いて、息も乱さないミリアを見やった。

「のやるっ……」

涼しい顔しやがって！

間髪入れず飛び出して、大ぶりの攻撃を加えるが、完全に見切られているのかひらりひらりと避けられる。

これまで自分より大きく、強い相手とばかり闘ってきたおれの弱点。

おれは、自分より小さな相手と戦ったことがほとんどない。ちょこまかと動き回り、懐に入り込んでくるミリアに対して、ど

う対処していいのかわからないのだ。

これはあくまで組手だから、ミリアは全力の攻撃を急所に叩き込んできたりはしないが、もし命を懸けた戦闘であったなら、今頃かなり厳しいところまで追いつめられていただろう。

再びおれの間合いを飛び越えて入り込んできたミリアの空を裂きそうな鋭い手刀が眼前を斬る。

返し手に掌底が額を直撃した。

脳が揺さぶられ、足元がふらつく。

このままじゃ、まずい。

おれはいったんミリアから距離をおいた。

じゃり、と足元の砂を踏みつける音だけが響く。すぐそこで別の『踊り子』候補が闘っている、ということなどとうに忘れてしまっている。

ここがおれとミリアだけの舞台かのように。

ミリアはおれをまつすぐに睨みつけてくる。

「それで終わりか、グレイシャー」

「まさか」

考える。

何よりいいお手本がおれの身近にいるじゃないか！

より体の小さい相手と戦うとき、あのヒトはいったいどうしていた？ 自分が彼に負かされるのは、いったいどんな時だった？

頭の中の動きをトレースする。

おれは右手のショートソードを仕舞い込んだ。

急に武器の片方をおさめたことに怪訝な顔をしたミリアだったが、おれが左手の剣を正眼に構えたことで気を引き締めた。

左手だけで長剣を操るあのヒトのようにには動けないかもしれないけれど。

ルウナーに教えてもらった舞を舞うように、ゆっくりとした動作で右手を剣の背にあてる。

そして、そのままショートソードを頭上に掲げた。

「負けないよ」

何度繰り返したかしのれない台詞を繰り返す。

頭上の剣を目の前で横に倒した。

「アレイさんは返してもらおう」

SECT・14 ブロンデン

数日後の武道大会で神前舞踏を行うかもしれない『踊り子』候補だ。顔はもちろん、手足などの露出する部分を傷つけるのは論外、即失格。

もちろんこれは試験であるし、おれが勝つ必要もないのだけれど、それでも、負けたくなかった。

勝って、アレイさんを自分の手で取り戻したのだという実感がほしかった。

いつも守られてばかりだから、たまにはおれが助けに行ってたっていいだろう？

感覚を研ぎ澄ませ。

悪魔を召喚していないのに、まるで加護が全身を駆け巡るかのような感覚に陥った。皮膚がみるみる鋭敏になり、ミリアの周囲に取り巻く軍神アレスの力の奔流までもが感じ取れるようだった。

ミリアもそれを感じ取ったのか、全身に巡らせる気を張り詰めた。刹那。

瞬く間もなく、ミリアが地を蹴る。

先ほどと同じだ。このまま懐に入られたら、おれは抵抗するすべを持たない。

引いた右足をとん、とずらした。

最小限の動作で体の向きを変え、相手の攻撃ラインからほんの少しだけずれる。

それだけでミリアから少し遠ざかる。

対人において初歩中の初歩だ。

しかしながらアレイさんはその間合いの取り方が天才的にうまくて、おれはいつも、彼の懐に入ることが出来ない。

だからおれも同じように、ミリアを近距離の間合いに入らせなけ

ればいい。

思うのは簡単でも、そんなに簡単に行くはずもない。

次の瞬間には右わきすれすれを鋭い拳が通過していた。

ブラックルビ

漆黒星騎士団の団服に似せて作った上着の裾がはじけた。

剣を握る左腕がかあつと熱くなる。

「ラースっ……！」

その熱が全身に飛散して、おれは思わずその場を飛び退っていた。強敵と相対しているとき、必ずこいつが出てきそうになる——ボクが君のてきを殺してあげル、と。長い犬歯をひっかけながら、たどたどしい言葉でしゃべる悪魔が、現世界に具現化しそうになる。

引っ込んでろ、ラース。これはおれの戦いだ。

しかしながら、額にはジワリと汗が滲んだ。

その様子を見たミリアが口の端に笑いを乗せる。

刹那、急襲。

間一髪、体を捻って受け流し、距離をとりつつ隙を待った。

最後の一撃だけはイメージできている。

さっきからずっと、右の攻撃をわざわざ左へ流しているのはその

布石だ。

歴戦の拳闘士だからこそ、否応なしに体が反応してしまうのだ。

よっぽど、自分の意識と意志とを全身に巡らせている冷静な戦士でない限り、それは絶対だった。

そして、その瞬間は訪れた。

左足を軸にした、右からの逆突き。まともに受ければ骨の一本や

二本持つて行かれかねない体重の乗ったいい攻撃だ。

狙い通り、ほんの少し左に重心が寄っていることまでも。

おれは構えていた剣を地面に落とした。

予期せぬ行動に驚いたミリアの右手首を逆手で掴み取り、体重方向に思い切り引き倒した。

「っ？！」

軽いミリアは、それだけで簡単に地面にたたきつけられる。

おれは空いた右手で腰のショートソードを抜いて――

「終わりだ、『軍神アレス』」

ミリアの右頬ギリギリを掠めた刃が地面に突き刺さった。少しでもずれていれば、顔に傷をつけてしまい、失格となっていただろう。もちろん、ミリアが少しでも身じろぎすれば鋭いショートソードは皮膚を裂く。

ミリアの真紅の瞳がまっすぐに見上げてくる。

その瞳の中の感情は、負けて悔しい、でも、悲しい、でもなかった。呆然と驚き、でもどこか安心したような不思議な感情が真紅の中に渦巻いていた。

いったいどうしたというんだろう。

目が離せない。

ミリアなら、負けても突っかかってくると思っていたのに――

紙一重の位置で硬直したおれたちを引き離したのは、見覚えのある赤髪の人物だった。

無言でおれの手から剣を抜き取り、ミリアを抱き上げたそのヒトは、皆から「軍神アレス」と呼ばれていた男だ。

突然の出来事に、ミリアは一瞬呆けたが、すぐに目を吊り上げて叫んだ。

「アレス！ 離せ！ 下ろせ！」

彼女が多少暴れたくらいではびくともしない。

典型的な東方の民の容貌を持つ彼は、すっきりとした目でおれを見た。

「ええと、アレスさん？ 初めまして」

剣をおさめ、頭を下げると、彼も目礼した。

無口なヒトだなあ。まるでアレイさんみたいだ。

ぼんやりとそんなことを思いながら見上げていると、また盛大な銅鑼の音が鳴り響いた。

はっとして周囲を見渡せば、最終試験に残った踊り子候補のうち、この場に立っているのはおれとミリアだけだった。

あとはアレスらしき赤髪の男性と、銅鑼を鳴らした巨躯の男。あのヒトは、『踊り子』試験の最初に、アレイさんと並んで出てきたヒトだった気がする。

「なんで？ 他のみんなは？」

首を傾げると、銅鑼を鳴らしたヒトが呆れたように言い放った。

「とうに次の会場だ」

「うわ！ 行かなきゃ！」

駆けだそうとして、どこへ行っているのかわからないことに気付いた。

会場を聞こうと振り返ると、おれの目に飛び込んできたのは、真紅の瞳から大粒の涙をこぼすミリアの姿だった。

思わずおれは、ミリアに駆け寄っていた。

「お、おい、ミリア、どうしたんだよ。痛かった？」

アレスに抱えられたミリアを見上げて問うと、ミリアはおれから目を逸らすようにしてアレスの肩に顔をうずめた。

「どうしたんだよ、ミリア」

長く垂れたツインテールの片方をちよいちよい、と引っ張るとミリアはむずかるように頭を振った。まるで駄々をこねる子供だ。

行き場を失った手で、ついでに気になっていたアレスの細い三つ編みをちよいちよい、と引っ張ったら、彼の眉間にしわが寄った。普通なら怒っている、と思うところだけれど、この表情は困惑しているだけだということをおれは知っている。

すると、そのヒトはおれの頭にぽん、と手を置いて、闘技場の出口を指した。

先に行っていて、と言うように。

「わかったよ。ミリアをお願いね」

ひらひらと手を振って出口に向かうと、案内人が待っていた。先ほどまで銅鑼を鳴らしていた巨躯の男だ。

「早くしろ。置いていくぞ」

腕なんておれの胴体くらいあるんじゃないだろうか。

並んで歩きだしたおれに、そのヒトはぼそりと告げた。

「あの娘に勝った女を見たのは初めてだ」

「だろうね。ミリアは強いもん。でも、戦場じゃわかんないかな。致命傷を負わせていい、っていう条件だったらおれが負けたかも」

そう言つと、巨躯の男は微かに笑んだ。

「戦場、か。だとしたら、あの娘はアンタに勝てんよ。あの娘は生死を賭けた戦いなんぞ知らんからな。というよりも、知っているほうが稀有だ。それを知っているアンタの強さは本物だ。アンタの旦那と、軍神アレスも同じ、平和なこの国に育った戦士とは名ばかりの者たちとは違う」

「アレイさんのこと知ってるの？ えーと、名前……」

「ブロンデンだ。ブロンデン」アステイノミコス。名目上は、ミュルメクスの護衛団長という風になっている」

「もしかして偉いヒト？」

首を傾げると、ブロンデンさんは楽しそうに笑った。体に似合う野太い声で、豪快に。

「偉いかと聞かれると、そうでもない。先代軍神アレスと少し親しかっただけだ」

「先代、ってミリアの前の軍神アレス？」

そう言つと、さすがにブロンデンさんは驚いたようだった。

「そこまで分かっていたとは……流石は、レメゲトンといったところか。もっとも、アンタの旦那は気づいていないようだったかな」

確かにアレイさんは案外、鈍感だったりするからなあ——なんて言つと、絶対に怒られるんだけど。

ブロンデンさんは先代の軍神アレスと親しかったといった。確かに、体躯は立派だけれど寄る年波は隠せない。年齢的に、40歳は越しているだろう。それでも、重厚な鎧に身を固め、戦場で大槍を振り回す姿が容易に想像できた。

「ミリアは軍神アレスだけど、じゃあ、あのヒトは誰？ 赤髪の、大きいヒト。たぶん東方部族だと思うんだけど」

「あれは、表向きの軍神アレスだ。国境の防備をつかさどる軍神アレスがあの形^{なり}じゃ、恰好がつかんこともあるだろう？ だから、あの娘はあの赤髪の男を表に立たせているのさ。あれが本物の軍神アレスではないと知っているのはほんの一握りだ。あの通り、全く言葉を発しないもんで素性は知れんが、反抗する気配はない。何より、あの娘がなついている。俺たちが何か口を挟む隙はない。全部あの娘が決めて、あの娘が実行した。それだけだ」

「ふうん。わざわざ別のヒトを出さなくても、ミリアがちゃんと外に立てばいいのに。目立つの、嫌いなのかな？ でも『踊り子』やつてくるくらいだから平気そうだけど」

「『軍神アレス』という名には拭えぬ理想像というのがあるのだ」

「どういうこと？ まるでミリアが軍神アレスらしくないって誰かが嫌がったみたいだけど」

そう聞くと、ブロンデンさんは答えなかった。

ミリアと、先代の軍神アレス、赤髪のヒト。複雑に絡み合った何かがこじれてしまっているみたいだ。

だめだ。おれは難しいことを考えるのには向いてない。

おれに負けたミリアの涙を思い出して、なんだか、胸のあたりがもやもやした。

SECT・15 エレーミア

通された最後の試験の部屋には、候補者が一人だけ待っていた。少し高くなった祭壇のような場所があるだけの、広い部屋。この場所も壁も柱も白く、床に敷かれた赤い絨毯だけが目を惹いた。

一人だけ残った女の子はおれの姿を見てにこりと笑った。

「あとの2人は棄権らしいよ。さっきの組手で、どっちかがどっちかの顔に傷つけちゃったらしいけど。だからあたしは不戦勝！」

女の子は、嬉しそうに笑った。

「あれ、じゃあこれで3人決まっちゃったのかな？ 『踊り子』候補は5人だったはずだから、残ってるのは、おれとあなたとミリアだけだ」

「やったあ！」

女の子の表情がぱあっと輝いた。

「あたし、エレーミア。この街の出身なんだ。よろしく！」

おれより少し背の高い少女は、にっこりと笑った。

「ずっと『踊り子』になりたかったんだ。試験に挑戦するのはこれで3回目。やっと夢が叶ったみたい！」

純粋なミルメクスの民らしい、波打つ淡い茶色の髪。健康的な笑顔が愛らしかった。この街に育って、この大会で『踊り子』になりたいという夢をずっと追ってきたのだろう。

おれは余所者。ミリアは大会の主催者。

きっと、『踊り子』に本当に相応しいのはエレーミアのような少女なのだろう。

「おれはグレイシャー・ロータス。セフィロト国から来たんだ」

「知ってる。街で噂になってた、フレリア様を演じていたのってあなたでしょ？ あたしも舞台を見たけど、とっても素敵だったよ」「ありがとう」

エレーミアの笑顔に、おれは思わず微笑み返していた。

同時に、ほっとした。

これでおれはミリアの言った通り、『踊り子』審査の最後まで残って、踊り子に選ばれたことになる。ミリアは、踊り子になれたらアレイさんの事を教えてやる、と言っていた。

「これで軍神アレス様にもお会いできる」

エレーミアの言葉ではっとした。

そうだった。最初の目的はそうだったんだ。踊り子試験に受ければ軍神アレスに会えるから、といって、モーリとルウナーはおれをここに寄越したんだった。

もうすっかり忘れていた。

しばらくしてやってきたミリアは、先ほどまで泣いていたことなど微塵も感じさせない毅然とした空気を纏っていた。

「ミリア」

駆け寄ると、鋭く睨みつけられた。

「ねえ、ミリア。おれさ……」

「約束」

ミリアはおれの目の前に人差し指を突きつけた。

「約束、だから、話してやる。今は待て」

「……わかった」

たくさん聞きたいことはあつたけれど、いったん口を噤む。

この場所で行われるのは、『踊り子』審査の結果発表……と言つても、すでにこの場に3人しかいないのだから決定しているようなものののだが。

しばらく待っていると、少し高まった祭壇に軍神アレスとブロンデンさんが立った。あの姿を見ていると、やっぱりブロンデンさんはとても偉いヒトのように思えるのだけれど。

あとでエレーミアに聞いてみよう。

本番の武道大会は3日後。それまで『踊り子』は軍神アレスの居

城に留まり、稽古を重ねる。

エレーミアとおれは同じ部屋に通された。

とても広い部屋で、右手と左手にドアがあり、さらに奥まで続いているようだった。相変わらず壁も柱も白いのだけれど、天井だけは全く違っていた。赤地に黒のツタのような複雑な文様が描かれていた。悪魔紋章にどこか似ている気もしたが、どうやら違う。

目の前にはシンプルなベッドが二つ。

エレーミアもおれも、柔らかそうなベッドにそのままダイブした。体を預けると、すぐにでも眠りに落ちてしまいそうさ。

「疲れた……」

隣でエレーミアが呟いた。

おれも、思った以上に気力も体力も消耗していたみたいだ。

「うん、疲れたね」

どうやらおれは、目的通り『踊り子』審査を突破できたようだ。

ようやくその実感が湧いてきた。

アレイさんに会うために必死だったけれど、あと3日もすれば、

あの闘技場で、おれは軍神アレスにささげる舞を披露することになるのだ。

早くあの舞台に立ちたい。舞踏を魅せたい。

いつの間にはおれは、神前舞踏そのものも求めているんだ。

エレーミアは突っ伏したままおれに聞いた。

「グレイシャーは旅の歌劇団のヒトなんだよね。どうしてこの試験に？」

「大切なヒトがね、ここにいるんだ。だから、会うために頑張ったんだよ……ごめんね、エレーミア。おれ、エレーミアや他のヒトたちみたいに、どうしても『踊り子』になりたいってこの試験を受け始めたわけじゃないんだ。最初はね」

「今は？」

エレーミアはベッドの上で膝を抱えて座り、おれを覗き込んだ。

おれは彼女に微笑み返す。

「嬉しいよ。おれ、思ってたよりずっと踊ることが好きみたいだ。戦うのはそんな好きじゃないけど、剣舞は好きだし、何より、おれの踊りを見て誰かが少しでも勇気を持ってくれたら、こんなに嬉しいことはないよ」

そう答えると、エレーミアは綻んだ。

「よかった。明日からよろしくね、グレイシャー！」

「グレイスでいいよ」

「じゃあグレイス。たくさん聞きたかったんだ！ 審査の直前に現れた候補だったし、すごい美人だし、踊りもうまいし、何より強いし！ 本当はもっと早く仲良くなりたかったんだ」

エレーミアはひよい、と飛んでこちらのベッドに移動してきた。さすが『踊り子』に選ばれただけあって、身体能力はかなり高そうだ。彼女はそのままうつぶせに寝転んだおれの隣に寝転がった。

「グレイスはどこの出身なの？ どうして今の歌劇団に入ったの？ どうしてそんなに強いなの？」

突然の質問攻め。

近くで見たエレーミアの瞳は淡い茶色だった。光の加減では金色に見えるだろう。

綺麗だなあ、とぼんやり見ていると、エレーミアの平手が額にヒツトした。

「グレイス、聞いている？」

「一応聞いてるよ！ ええとね、おれ、出身はグリモワールなんだ。だから戦争にも参加してて……だから戦闘はあんま好きじゃないけど得意。普通のヒト相手だったらだいたいは負けない自信あるよ」

「戦争？ って4年前の？ グレイス、いったいいくつ？」

「23歳」

「うそ？！ あたしより5つも年上？！ 同じ年か年下だと思ってた」

「フェリスにもアウラにも同じこと言われたよ」

言動や雰囲気は幼いと言われるし、未だに18歳くらいに思われ

ることが多いらしい。

「おれ、これでも結婚してるし、2歳になる子供もいるよ」
そういうと、エレーミアは絶句してしまった。

驚かすつもりはなかったんだけど。

エレーミアは、しばらく突っ伏して何か考えているようだったが、すぐに顔を上げた。

「ああ、びっくりした！ 人は見かけによらないっていうからね！」
「ここに迎えに来た大切なヒトっていうのはおれの旦那さんの事だよ」

「グレイスの旦那さんはリケイオンの人なの？」

「ううん、違うよ。グリモワールだよ。一緒に国境を超えるつもりだったんだけど、わけあって逸れちゃったんだ。でも、どうやらここにいるらしいから迎えに来た」

「ふうん」

エレーミアはそれを聞いて、首を傾げた。

そして、おれの髪を一房、指に絡めてくると遊んだ。それからじいっとおれの目を覗き込んだ。

「黒髪黒目、グリモワール出身でそれだけ強い。んでもって旦那がここにいて……」

大きいため息をついたエレーミアは、耳元でぼそりと呟いた。

「ラックⅡグリフィス」

「え?!」

ばれちゃった?!

驚いた顔をしたおれに、エレーミアが額を軽く指ではじいた。

「バカ、あたしじゃなくても分かるよ。隠す気ないの?」

「……アウラにも言われた。そんなに分かる?」

「そりゃね。黒髪黒目ってだけでもこの辺じや珍しいのに、一か月前って言ったらちょうど、セフィロト国の神官が国境侵犯した時期、それどころか今回の武道大会の目玉は軍神アレス様と悪魔騎士アレクスターⅡクロウリーの演武。これだけそろってたら、さすがにわ

かるよ……って、それだけじゃないんだけど」

エレーミアはおれの頬を指でつつんつついた。

「でもまさか、こんなところで会うとは思ってなかった。ただ、アレスター・クロウリーの名からそれだけ連想できる程度には、グレイスたちが有名だったこと」

「アレイさんとはかく、おれはそうでもないよ」

「ここが国境っていうのもあるけどね。セフィロト国は本気でレメゲトンの生き残りをつぶそうとしてるよ。もう少し用心したほうがいい」

エレーミアはにこりと笑った。

「容姿だのなんだのは本当に些細な情報でしかないよ。グレイスが持つてる目印はそんなものじゃない。誰が見ても、ただものじゃないってすぐに分かるその存在感で目立ちすぎてる。もし明日、その姿でみんなの前に出ちゃったら、それどころかその、悪魔騎士さんと並んだりしたらみんなすぐにわかつちゃうかもね」

同じことをモーリやルウナーにも言われた気がする。

あなたたちは、そこにいるだけで人の目を惹く存在なのだ、と。

「そうなのかなあ……」

おれが唇を尖らせていると、エレーミアはおれの頭をぐりぐりと撫でた。

「ああもう、なんだか頼りない年下の妹でも出来た感じ？ 年上だけど！ 何かあっても、あたしはグレイスの味方するからね！」

「ありがとう、エレーミア」

へらつと笑うと、エレーミアはわしわしとおれの頭を撫でまわした。

こうしておれは、また一人、味方を増やした。あの胡散臭いやコブが言ったからじゃないけど、本当におれは周囲のヒトに恵まれると実感する。

エレーミアと仲良くなれたんだから、ミリアとだって仲良くなりたいのにな。

おれは、ぼつりとエレーミアに聞いた。

「ねえ、エレーミア。エレーミアは、先代の軍神アレスを見たことがある？」

「当たり前じゃん……あ、グレイシャーはここに来たばかりだからもしかして見たことない？ あかね、今の軍神アレス様と同じ立派な剣士で、燃えるような赤い髪がとても印象的だった。ほら、ずっと踊り子に選ばれてるミリアリユコスⅡエリユトロンっているでしょ？」

「あ、うん」

「あの子は、先代の軍神アレスの娘だよ」

「……え？」

赤髪。剣士。軍神アレスの理想像。

ぼんやりと何かがつながった気がした。

ミリアはもしかして、赤髪のあのヒトに誰かを重ねているんだろうか。

そんなことを考えながらいたせいだろうか。疲れに負けてうつらうつらとまどろみゆく意識の中で、おれは無意識に自分の育て親の面影を追っていた。

SECT・16 逃走

次の日、おれとエレーミアはミリアの声で目を覚ました。

「起きろ。本番まであと2日しかないんだ。稽古を始めるぞ」

昨日の晩は疲れ切って早めに眠ってしまったから、かなり長い間眠ったはずだ。その証拠に、体はとても軽かった。

なんだろう。とても懐かしい夢を見た気分だった。

ベッドに座り込んで見渡せば、昨日は暗くて気づかなかったけれど、部屋には小さな窓がついていて、そこから光と共に柔らかな風が吹き込んでいる。

早く支度をしろと急かすミリアを無視して窓に向かうと、案の定、彼女は苛立った声で叫んだ。

「おい、聞いているのか、グレイシャー！」

「一応聞いているよ」

言いつつも、肩幅と同じくらいしかない窓から身を乗り出した。

「聞いてても言うことを聞くかどうかは別問題だね。あたしも顔洗ってくるからちょっと待ってて、ミリアちゃん」

「お前もだ、エレーミア！」

二人の声を背中で聞きながら、おれは目の前の景色に圧倒された。小さな積み木が折り重なって出来た都市が一望できる。朝日を受けて長く四角い影を方々に伸ばしながら、歪な街がぎっしりと詰まっている。その向こうに草原を跨いで連綿と横たわるのは、セフィロト国との国境壁だった。

迷子になりそうな細い路地もここから見下ろせば繋がった線に見える。

「あつ、あれ、劇場だ！」

歌劇団ガリゾントが革命少女リオート・シス・アディーンの公演を行ったあの劇場だった。よくよく見たら、モーリヤルウナーがいたりしないだろうか。

そう思つて目を凝らそうとすると、後ろから強い力で引つ張られた。

抵抗する間もなく、床に引きずりおろされる。

「はやく支度しろと言っているんだ。顔面殴りつけて今から失格にしてやるのか？」

「やめなよ、ミリアちゃん。時間がないって言ったのはミリアちゃんだよ？　ここで一人減らしてどうするんだよ」

エレーミアはふわりと広がっていた髪を高い位置にまとめ、服も動きやすそうなものに変えていた。

ミリアはそういわれて、しぶしぶ手を引いた。

おれはその様子にびっくりしてしまった。

「エレーミアはすごいな。ミリアはおれのいう事なんてちっとも聞かないのに」

「お前だつて私の言う事を全く聞かないだろう、グレイシャー」

「んじゃお互い様だね」

言いながらラフな短衣に着替えた。

ミリアはひどくイライラしているようだったけれど、時間が惜しいのかおれたちを先導して歩き出した。

殺風景な白い廊下を歩きながら、ミリアは淡々と告げた。

「試験で見て、お前たちの実力は分かっているつもりだ。演武の振り今日は今日中におぼえろ。できるだろう？　明日は一日通し稽古だ。

それから、グレイシャー」

「何？」

「最後の剣舞はお前と私でやる。いいな、エレーミア」

「もちろん。ミリアちゃんとグレイスの戦いに入るなんて、そんな恐ろしいことできないからね」

エレーミアは肩を竦めた。

「グレイシャー相手なら、久しぶりに本気を出せそうだ」

にいつと笑ったミリアの表情は、これまでよりずっと明るく見えた。

昨日、最後に見たのが泣き顔だったからかな……？

何にせよ、よかった。

嬉しくて笑うと、ミリアは眉間にしわを寄せた。

「何がおかしいんだ？」

「なんだかミリアが元気そうだからよかったなあと思って」

「気味の悪いことを言うな」

ミリアが少し頬を赤くしながら突っぱねる。

なんだかわいいなあ。

そう思っ少し見下ろす位置にあるミリアの頭を撫でていると、少し後ろを歩いていたエリーミアは顔を覆って肩を震わせていた。

「どうしたの、エリーミア」

「もっつ……なんだかおままごとみたいで二人とも可愛くって……！」

そこでミリアの沸点はどうとう天井突破してしまったようだった。

「もう知らん！ 二人とも勝手にしろ！」

そう言い捨てて、二つに括った赤い髪を揺らしながらミリアは駆け行ってしまった。

おれとエミーリアは顔を見合わせた。

「怒らせちゃった」

「そのようだね」

しかしながら、ここに放り出されると、おれもエミーリアもどうしていいかわからない。

なにしろ廊下は殺風景で、もといた部屋にだって戻れる保証はないのだ——ああ、王都ユダのジュデツカ城で迷子になった時を思い出す。あのときは、サンが助けてくれたっけ。

と、そんなことを懐かしんでいる場合ではない。

「追うよ、グレイス」

「もちろん！」

おれとエリーミアは並んで走り出した。

「ついてくるな！」

叫ぶミリアを追っていく。

さすが、エレーミアは足も速い。普通の女の子ならとうにねを上げている速度だ。

「逃げたら追っかけるさ！　なあ、グレイス！」

「もちろん！」

「お前たちは獣か！　バカ！」

やたらと人気のない、素っ気もない殺風景ですつと同じ風景の廊下をただ追いかける。少し右向きに湾曲しているから、ずっと走っていれば元の場所にでるはずだ。

隣を見ると、エレーミアも同じことを考えていたらしい。

「行つて、グレイス。あたしはここで待つてゐるから！」

「了解！」

おれはさらに追う速度を上げた。

端から見れば無意味な追いかっこ。こんなことをしている間に本番の稽古をすべきだということも分かっている。

途中、衛兵らしきヒトを何人が抜いた。

なんだか少しずつヒトが増えていく気がする。

それに、結構な距離を走っているはずなのに、エレーミアの姿が全く見えない。

おかしいぞ。ずうつと右に向かって曲がっているはずなのに……

「もしかして、少しずつ上つてゐる？」

ここが円形じゃなく、らせん状の廊下だとしたら。

しまった、これじゃいつまでたってもエミリアと合流できないぞ。

そのうえ、数回ほど衛兵を飛び越えている間に、ようやくおれとミリアが追いかっこしているという情報が出回ってしまったようだ。

何人かの衛兵がミリアとおれの間に立ちはだかった。

「ごめん、どいてっ」

ショートソードを抜くこともなく、低い体勢で隙間を縫って、ついでに最後に一人はひざの裏を思い切り蹴り飛ばして転がしてしまった。

これで少しは時間が稼げるはず。

さすがのミリアもこれにはぎょっとしたようだ。

「うちの衛兵を簡単に倒すな！」

「倒してないよ、避けただけだ！」

「屁理屈言うな！ バカグレイシャー！ あと追っかけてくんない！」

「逃げたら追うだろ、普通！」

と、ミリアの言葉はそこまでだった。

思い切り伸ばした右腕が、ミリアの腕を捕えることが出来たから。
「やった」

と、もちろん勢いは殺せず、おれたちはそのままもんどりうつて転がった。

「いってー……」

「ふざけるな！ グレイシャー！」

ミリアは起き上がるなりおれの胸倉を掴みあげた。

「ふざけてないよ。ミリアがいなくなっちゃったら、おれもエレミアも迷子になっちゃうから追いかけてたんだよ。だって急に行っちゃうんだもん」

そう言われて、ミリアもさすがに悪いと思ったのだろう。

顔を真っ赤にして黙り込んだ。

が、それも一瞬。

「お前のそういうところが嫌いなんだっ！」

おれをまっすぐに見つめて叫んだ。

「バカで！ 何も考えずに突っ走るし！ 私の気も知らずに笑いかけるな！ 近寄るな！ 追いかけてくるな！ その上……なんでお前なんか私より強いんだっ！」

その言葉が、胸を貫いた。

この年で軍神アレスの名を継いで、あれだけの實力を持ちながら、軍神アレスの理想像とは違うからと代役を立て、それでも『踊り子』として人々の前で舞うことを辞めず。

ああ、きつと彼女は苦しかったんだ。自分が理想になれないことが。人々の求める軍神アレスの像と自分とがかけ離れていることが。だって、これだけの強さを手に入れるには、血のにじむような努力が必要だったはずだから。

「……もう、落胆されるのは嫌なのに」
絞り出すような声でミリアが呟いた。まるで泣いているような声で。

昨日、おれに負けた瞬間に見せた表情を思い出し、苦しくなる。
何と言葉をかけていいかわからず、口を噤んだおれに、上から声が降ってきた。

「おい、子供を苛めるな、くそガキ」
とても聞きなれたバリトンの響き。
それだけで心臓がドキドキした。
どうしよう。まだ心の準備が――

でも、無理だった。

その声を聴いたらおれはもう我慢できなくなって、振り返った。
目に飛び込んできたのはやっぱりおれの一番大切な人で。
何を考えるより早く駆けだしていた。

「アレイさんっ」

そのまま、そのヒトの腕の中に飛び込んだ。

「……ラック」
懐かしいバリトンの声がして、優しい手が頭を撫でていて、泣きそうになった。

世界で一番安心できる場所にようやく戻ってきた。
なぜだかアレイさんからは、ほんのりと甘い花の香がしていた。
それがいつたい何の匂いなのかはわからなかったけれど。

「よかった……生きてた……」

絞り出した自分の声は震えていた。

約束通り、おれはようやく大切なヒトと再会した。

——必ず生きて、リユケイオンで。

サンダルフォンの気配がしたあの日、セフィロト国最東端の都市
リンボで別れてから、1か月が経っていた。

SECT・17 再会

アレイさんはそのままおれを抱き上げると、廊下を歩き出した。おれは胸が詰まってしまって、声が出なかった。鼻の奥がつんとして胸がきゅつと詰まって、代わりに涙があふれ出した。

アレイさんの首に手を回すように抱きついて、肩に額をあてて静かに泣いた。

耳元で優しいバリトンが響く。

「年下の少女相手にいったい何をやっているんだ」

「だ、だって……ミリアがっ……」

声が出せない。

嬉しくて、安心して、これ以上どうしようもなくなつて。

ますます強くアレイさんに抱きついた。

「アレイさんのばかり……」

「悪かった」

「し、死んじゃったかと思つたんだよ」

「……だから、悪かった」

「おれのこと、追り返すしさ……」

「それは知らん。追り返した覚えはない」

「嘘だあー」

駄々をこねたおれに、ため息をついたアレイさんは、なだめるようにとんとんと背中を叩いてくれた。

緩やかなリズムが少しずつ落ち着けていく。

扉を後ろ手で閉じて、アレイさんはふう、と一息ついた。

「悪かった。あの時はああするしかなかったんだ。あの場にフェリスがいた以上、サンダルフォンが出てくるのは時間の問題だった。みすみす二人で捕まることもなかるう」

そんなことわかつてるよ。

でも、嫌だつたんだ。

アレイさんはいつだって、自分を盾にしておれを逃がすから。血の匂いはしなかったけれど、やっぱりどこか甘いにおいがした。不快ではなく、むしろ懐かしい感じのする香りだった。

なのに、何故かその香りは焦燥をかき立てた。

「……また、怪我したの？」

おれの問いに、アレイさんの返答がない。

これは大怪我をしたとみて間違いないだろう。

絡めていた腕を解いて、アメジスト紫水晶の瞳をじいつと覗き込む。吸い込まれそうなほど澄んだ瞳は、心なしか以前より赤みが増している気がした。

でも、アレイさんは目を逸らさなかった。

その眼の奥に潜むのは、嬉しさでも悲しみでも戸惑いでもなく……

…迷い、だった。

目が離せない。

声のない会話を交わすように、おれはアメジスト紫水晶だけを見ていた。

アメジスト紫水晶を少しずつ侵食するガーネット炎妖玉の色に、見覚えがある気がして

そう、おれは、アレイさんが迷っている理由を知っている。

さつきからずっと、左腕が微かに痛かったから。

アレイさんも知ってるのかな。

ラースとマルコシアスさんが片割れ同士だということ。もしかしたら、ラースを身に宿すおれと、マルコシアスさんの血を継ぐアレイさんは、そのうち争い合うことになってしまつかもしれない、ということ——

やがて、アレイさんはふいに口角をあげた。

「大丈夫」

ぽつりと呟いて、目の奥から迷いが消える。

あ。

不意打ちの笑顔に、心臓の拍動が早くなった。

アレイさんは、おれの左手をとって軽く口づけた——ラースのコ

インが埋まる左手の甲に。

「大丈夫だ。ラック、お前は俺がいなくてもここまで来られたろう？」

「でも、アレイさんがいないとやだよ？」

返事の代わりに、頭をぽんぽん、と撫でられた。

「約束しただろう。俺は、お前の傍からいなくなったりしない」

「……うん」

もう一度、両手を背に回して抱きついた。

やっぱりここは、世界で一番安心できる場所だった。

たくさんわめいてたくさん泣いて、落ち着いて。
ようやく少しずつ、これまでの事を話し出した。

「……あの時さ、やっぱりシアが来てたの？」

「ああ。サンダルフォンを召喚して、リンボの街中で争いになった。
あのままでは被害が拡大するからな、強硬に国境を越えたんだ。無
傷とは言わなかったが……ウリエルを名乗る男に助けられた」

「ああ、ヤコブだね。そういえばサンダルフォンを追い返したって
言ってたっけ。ヤコブならいま、おれたちと一緒に行動してるよ！
なんだかんだ言いながら助けてくれるし、いいヒトだよ」

そういうと、アレイさんは何ともいえない表情でおれを見た。

「……まあ、いい。そのあと、軍神アレスに拾われて、それから
ずっとここにいる」

「怪我は？」

「この城に美神アフロディテが来ている。彼に治してもらった」

「アフロディテ？ 軍神アレスと同じオリュンポス？」

「そうだ」

ミリア以外にもここにオリュンポスがいたんだ。
会ってみたいな。

「お前は？ モーリたちと国境を越えたんだろっ？」

「うん。大変だったけど。シドにずいぶん助けてもらった」

「シド……というと、あの元騎士団員か」

「あれ、知ってたの？ そうだよ。最後の年の騎士団試験に合格したって言ってた。あの、グライアル平原の戦いにも参加したらしいよ。だからおれたちの事を知ってたんだって。不思議だね、戦争から4年もたつのに、こんな異国で会えるなんてさ」

話したいことはたくさんあった。

モーリのこと。ルウナーのこと。ヤコブとアウラのこと。シドのこと。フェリスのこと。

「そうそう、シドがね、武道大会にも出るって言ってた。あ、そうだ！ アレイさんも演武に出るって聞いたよ。軍神アレスと戦うの？」

「ああ、そうだ」

「頑張つてね、アレイさん！ おれ、一番前で応援するよ！」

本当はまだまだたくさん話したいことがあったけれど。

おれはアレイさんの腕から降りた。

少しだけ遠くなった紫水晶アメジストが名残惜しかったけれど。

「ミリアに謝らなくちゃ。それに、エレーミアも置いてきちゃったんだ。神前舞踏の練習もしなくちゃいけないし」

見上げたアレイさんは微笑わいっていた。

「今度は泣かすなよ、くそガキ」

「……分かってるよ」

おれも笑い返して、部屋の出口に向かう。

と、ドアノブに手をかける前に、こんこん、と向こうからノックされた。

「はい？」

返事をする、扉があいて、エレーミアがひょっこり顔を出した。
「いた！ もう、あたしだけ置いてかないでよ、グレイス！」

「あ、ごめん。今から迎えに行こうと思ってたんだ」

頬をふくりますエレーミアは、部屋の奥にいるアレイさんに気付

いたらしい。

「……グレイスの旦那さん？」

アレイさんもそれに気付いて、軽く会釈した。

「綺麗な人だね。うん、グレイスとすごく似合う」

エレーミアは、胸元に手を当て、頭を軽く下げた。

「エレーミア、アネモスと申します。アレイスター・クロウリー殿、お目にかかりまして光栄でございます」

「こちらこそ、このくそガキが世話になっている」

「いいえ、年の近い妹が出来たみたいで楽しいです」

「それは……恐れ入る」

アレイさんは他のヒトにはわからないくらいの微妙さで驚き、肩を竦めた。

いつもの事なのに、こんなにも嬉しい。

「おれ、エレーミアと行って練習してくる！ ミリアのところにも行かなくちゃ」

そう言うのと、エレーミアはくすくすと笑って扉を指した。

「ミリアはそこで待ってるよ、グレイス」

「え、そうなの？」

振り返ると、アレイさんは早くいけ、と目線で訴えていた。

「いつてきます！」

「旦那さん、ごめんね。本番まで、ちょっとだけグレイスを借りるよ」

エレーミアと二人、手を振って。

扉をでたところでミリアと出くわした。

何ともいえない顔でおれを見上げてきたミリアに、おれはぺこりと頭を下げた。

「追いかけてまわしたりしてごめん。もうしないよ。だから……一緒に練習しよう？」

それを聞いたミリアは、そっぽを向いた。

ああ、また嫌われちゃったかな？

「言われなくてもそうするつもりだ。本番まであと2日しかないのだぞ？　こんなところで遊んでいる暇はない」

そういったミリアの顔は赤かった。

ミリアともっと仲良くなれる気がした。

武道大会本番まで、あと2日。

SECT・18 武道大会

初夏の風が平原を吹き抜ける中、ミウルメクス武道大会当日がやってきた。

3日前から軍神アレスの居城にこもっているおれにさえ、徐々に高まるその熱気が伝わってくるようだった。窓からは人々の宴の音が入ってくるし、居城内にもヒトがどんどん増えていく。

そして当日。

窓から見下ろした街は、見たことのない色に染まっていた。

「街が赤い！」

白い壁が積み木のように折り重なっていた街に、無数の赤い旗が舞っている。

よく見ればそこには、複雑な文様が描かれている。まるで悪魔紋章のようなそれは、この部屋の天井と同じだった。

もしかすると、あれは軍神アレスの紋章なのだろうか。

エレミアに問うと、そうだよ、と答えてくれた。

「軍神アレスの象徴であるベルガモットの花の形を模している。戦いに赴く戦士が自身を鼓舞するときに焚く花だよ」

エレミアはこの部屋に据え置いてある香炉に火を入れた。

覚えのある香りが部屋にふわりと広がる。このミウルメクスに来てからずっと付きまとうてきた、なんとなく落ち着かなくさせる香りだ。どうやらその正体はベルガモットという名だったらしい。甘い中にすうっと涼しげな香りが混じるこの香りをかぐと、頭の中がすっきりとする気がした。

戦に向かう戦士たちが心を落ち着けるにはもってこいだろう。

初夏のミウルメクスはこの上なく心地よい風に撫でられて、武道大会の参加者と、観光客とでこった返す街は活気に満ちて、朱色の旗が翻る空には、雲一つない。

昨晚、遅くまで踊りの稽古を続けていたエレミアがあくびをし

ながら隣の窓から外を覗き込んだ。

「わー、いい天気！ 大会は午後からだっけ？ 開幕式、神前舞踏、演武、それから初日の試合が少し……長い一日になりそうだ。大会には、グレイスの知り合いも出るんだよね？」

「うん、シドが出場するって言ってたよ。シドは強いからね、なかなか負けないと思うよ。試合がいつなのかわかんないけど」

「演武が終わったらあたしたちは解散だから、楽団の人達と合流するといい。あ、そうそう。あとは表彰がある最終日だけここにいないくちやいけないんだよね。また忘れてミリアちゃんに怒られるところだった」

「本当だね」

くすくす笑ってエレーミアを見ると、薄金の瞳がじいっとこちらを見ていた。

どうしたの、と首を傾げると、エレーミアがそのまま身を寄せてくる。

「な、何？」

思った以上に近いのだけれど。

ああ、でも、近くで見てもエレーミアは可愛いな。特別目が大きかったりとか、鼻筋が通つてるとかそういうわけじゃないんだけど、すごくバランスの取れた顔立ち。よくよく見るとものすごく整った容姿をしている。

ミリアみたいに孤高の雰囲気醸し出している美貌のようなものではなくて、エレーミアを見ているととても安心する。笑うと、目尻が下がって見る方まで幸せになれるのだ。

ぼんやりと見つめ返していると、鼻の頭を人差し指で抑えられた。「気合抜き過ぎ。あたしが敵だったらどうするんだよ、グレイス」

「エレーミアは敵じゃないよ？」

そういう事じゃない、と言いたげなエレーミアは、言葉を飲み込んで。

「それより、グレイスの旦那さん、軍神アレスと戦うんだよね？」

ぐいっと再び顔を近づけて。

「どっちが勝つと思う？」

「そりゃ、アレイさんが勝つよ」

「……即答だね」

「当たり前だよ。アレイさんはおれより強いもん」

そう答えると、すごい自信だね、とエレーミアは肩を竦めた。

動きやすい格好に着替えたところで、そろそろだろうか。

と、二人で扉に注目。

「いつまで寝ている気だ？　すぐに準備しろ、大会は午後、すぐに始まるのだぞ！」

ノックなく部屋に入ってくるなり、ミアはそう言った。

「分かってるよ、ミアちゃん。すぐ行く。衣裳部屋は部屋出て、右だっけ？」

「左だ、バカ！　お前たち二人は信用ならん。私が連れて行くから早く支度しろ」

いつもの調子で、腕を組んで鼻を鳴らしたミアに、おれとエレーミアは顔を見合わせて笑った。

衣裳部屋に入り、おれたちは『踊り子』の衣装に着替えることになった。

昨日のうちに採寸は済んでいて、サイズは調節してあるとのことだったが……衣裳係だという数名の女性が寄ってたかっておれに着付け始めた。

これまでの経験上、こうなるとされるがままにするのが一番いいことをおれは悟っていた。

右手あげて、と言われたら右手を上げる。はい、後ろ向いてと言われれば文句を言わずその場で方向転換する。腹のあたりをぎゅうぎゅう締め付けられたって、文句は言わない。ひどく重い装飾だって、甲冑に比べれば、軽い軽い。

んだけど、やっぱり苦しいことには変わりない。

嫌そうな顔をしていたら、隣のエレミアに眉間を指でつつかれた。

「そんな顔するなよ、グレイス。ちつとの我慢だって」

そう言うエレミアの頬もひきつつている。

ふわふわと広がっていた髪はすべて編みこまれ、非常に細い三つ編みの束になって流れていた。この短時間でこの作業をこなしてしまった衣裳係の女性たちには感服せざるを得ない。エレミアはくるぶしまで隠す長い純白のドレスに身を包み、細長い金の布を軽く纏った。

ミリアはいつも高い位置で括っていた髪を下ろし、黄金の額当てを装備している。いつものように真紅のセパレートではなく、ほとんど縫いつくろっていない白布を上手く合わせて結び、ひらひらと舞うような衣装になっていた。布が上質のため、シンプルなその衣裳がみすばらしく見えることもない——それには、ミリア自身の存在感もあつてのことだろうが。

おれも、ミリアと左右対称、ほとんどおそろいの衣装を身に着けた。

最後に、腹より少し上、胸の真下を幅広の赤帯でぎゅうつと締め付けられ、息が止まりそうになった。

「おれ、白とか赤はあんまり似合わないんだよなあ。黒のほうがカッコいいから好き」

ひらひらとする衣装の胸元を引っ張りながら言つと、エレミアがにこりと笑った。

「そう？ 戦女神フレイアの衣装はとってもよく似合ってたよ？」

それに、運命の女神ラケシス様の衣装もとってもよく似合ってる」

「ほんと？ じゃあ、いいか」

「……単純なヤツだな、お前は」

ミリアがため息をついて、腰に『大鋏』を模した剣を指した。

おれたち3人が演じるのは、運命の女神『モイライ』、通称モイ

ラ三姉妹。モイラ三姉妹の決定する運命には主神ゼウスでさえも抗えぬと言われている。現在を司る『クロト』役のエレーミアが糸を紡ぎ、過去の『ラケシス』を演じるおれがそれを測り、未来の『アトロポス』であるミリアがそれを断つ。

おれが腰に下げるのは、ラケシスの持つ定規を模した剣だった。運命をつかさどる女神たちが、軍神アレスの為に舞い、この大会の成功を確約するのだ。

最後の剣舞はおまけのようなもので、決着は必ず未来のアトロポスが勝つことになっている。だいたいの筋書きも決まっているし、昨日から何度も手合せしている。

もっとも、ミリアの様子からその程度で終わらせる気がないことだってわかっていたけれど。

おれだって、本気の手合せは望むところだ。

「いくぞ。開会はもうすぐだ」

ミリアの号令で、おれたちは会場へと向かった。

闘技場に近づくにつれ、徐々に熱気が伝わってくる。試合前のピリピリした空気と、お祭りのむせ返るようなヒトの熱が混合されて押し寄せてくるようだ。

数日前に見た闘技場の客席いっばいにヒトがいる様子を想像して、背筋がぞくぞくした。

闘技場の門を潜るまでもなく、大歓声に包まれた。

耳がマヒするほどの歓声は、あのとき、戦場で聞いた闘の声に匹敵する轟音。

轟音――

目の前にセフィロトの国旗とグリモワールの軍旗が翻り、真っ赤に染まるフラッシュバックに襲われた。崩れ落ちていく城の外壁が、倒れ逝く兵士が、目の前をありありと通り過ぎていく。

あ、ヤバイ。

おれは思わず足を止めた。

「どうした？　グレイス」

エレーミアの声が遠い。

左腕が痛い。

駄目だ。

「だ、大丈夫、ちょっと音に酔っただけ……」

左腕を抑えて蹲ったおれの隣に、ミリアがしゃがみこんだ。

そして、耳元で囁いた。

「『今は思い出すな』」

ミリアの声は不思議と頭の中に染み入り、まるで絶対的な命令のようにおれの中に入り込んできた。

その瞬間、フラッシュバックした光景は霧散し、大歓声が耳に届いた。

「ミリア、今の」

「言霊。軍神アレスの力の一つだ。気にするな。とりあえず立て」

エレーミアに聞こえないよう、こっそりとおれだけに呟いたミリアに腕を引かれ、立ち上がった。

左腕の痛みも嘘のように消えていた。

「行くぞ」

二度目のミリアの言葉。

今度こそおれたちは、闘技場の門を潜った。

最初、視界を埋めたのは天頂から降り注ぐ太陽の光だった。

それから、迫りくるような人の波。

そして先ほどから耳に迫っていた大歓声と熱気。

息が止まりそうになった。

気分がひどく高揚した。

目の前の闘技場には、ディアブル大陸全土から集結した戦士たち。そして戦いを心待ちにする観客たち。

闘技場の中でも中心に近い、一つ飛び出たバルコニーのようにな

っている場所に、軍神アレスとアレイさんと護衛隊長のブロンデンスさんが立った。

赤と黒と金色と。

東方部族とグリモワールの民とリュケイオンの民。

ばらばらなのに、とてもバランスのとれた3人だ。『踊り子』としてここにいるおれたちさえ、思わず見惚れてしまうほど。会場中が息をのんだのが分かった。それだけ、あの3人の存在感は別格だった。

軍神アレスがずっと手を挙げたのが合図——開会宣言。

こうして武道大会は開幕を迎えた。

SECT・19 演武開始

開幕と同時に、おれたち3人は闘技場の真ん中に飛び出していく。待機していた楽隊から音楽があふれ出す。

本当は、練習なんかなくてもよかった。

こうして音楽に身を預ければ、体は勝手に動き出す。

気が付けば会場全体が静まり返って、音楽だけが聴こえて、数多の視線がおれたちに注がれていた。

『クロト』が紡いだ運命の糸を、『ラケシス』が測り、『アトロポス』が断つ。

総てのヒトの、そして軍神アレスを含むすべてのオリュンポスの運命を握る女神たちが舞う。

エレーミアの紡ぐ糸は細長く風に舞う金布となって。

その金布に沿うようにひらりひらりとおれは舞う。

おれと背を合わすようにして、ミリアが剣で舞う。

すべての戦士が全霊を尽くし、技を競う様すべてを見守るように。精霊界に居るといふ、オリュンポスたちにも届くように。

おれがこうしてみんなの前で踊ること、少しでも誰かの心が明るくなるのなら。

一曲目が落ち着いて、二曲目が始まる。

穏やかな編拍子の曲が始まり、おれたちは立ち位置を変える。

これはエレーミア演じる『クロト』が主役の曲だ。

クロトは、過去の運命を司ると同時に、運命を紡ぐ存在、命を紡ぐ存在としての信仰も深い女神だ。

時折、からかったりしながらも、何だかんだとおれたちの世話を焼いてくれたエレーミアにはびっくりだと思う。彼女はとてもやさしい。

きつと、ミリアがただの『前軍神アレスの娘』でただの『踊り子』じゃなかったとしても仲良くしてくれる。

大丈夫だよ。

みんな受け入れてくれる。

不意にミリアと目が合つて、視線を交わす。

敵意ではなく、殺気でもない。

それでも、戦いを察した空気を纏い。

三曲目が始まった。

クロトが祈りの体勢で舞台中央に静かに腰を下ろす。

そして『ラケシス』は定規を、『アトロポス』が大剣を翳し、クロスさせた。

「手を抜くなよ、グレイシャー」

「ミリアもね」

かぁん、と高らかに剣先を打ち合わせたのが合図。

最大の見せ場、ラケシスとアトロポスの剣舞が始まった。

会場は、桁外れの舞に息をのみ、静まり返った。

優勝者が得るといふ軍神アレスとの演武にだって負けない戦いを見せていることだろう——何しろ、ミリアは本物の軍神アレスなのだから。

ミリアは基本的に拳闘士だけれど、無論、剣の扱いもずば抜けてうまい。

もともとの才能に加えて、かなりの鍛錬を積んできたはずだ。

そもそもおれの剣は空演を前提に組み立てた我流だから、普通の剣とは比べ物にならないくらいに早い。その分の軽さを体重の上下動作で補って戦っているのだ。

それなのに、ミリアはそのすべてに反応してくる。

勘がいいのだ。

相手の目線や体の動きから次の攻撃を予測するのが段違いにうまい。

それに加えてこの小柄な体は素晴らしい瞬発力を発揮して懷に飛び込んでくる。

寸でのところで大鋏の急襲を避け、ミリアを見れば、彼女はいっと口の端に笑みを湛えていた。

楽しくて仕方がない。

そんなのおれだつて同じだ！

じゃれ合うようにして剣を交わし、紙一重の感覚を愉しんだ。

何より、これまでと違うのは、ミリアが寸止めをやめ、本当に攻撃を仕掛けてきているところだ。

殺気はないが、やる気はあるようで、一歩間違えば大怪我を負いかねない無謀な攻撃を仕掛けてくるミリアに、おれもつられて熱くなる。

踊り子は今日で終わりだから、怪我を気にする必要なんかないだろう。

多少の負傷は覚悟で大きく上から振り下ろされてきた剣を掌底で横から弾く。

そのまま肩から突っ込んで、ミリアを舞台の端へと弾き飛ばした。派手な演出に、客席からどよめきが沸き起こる。

高まる音楽に合わせて大きく剣で天を指しながら、ミリアはゆっくりと起き上がった。

「無茶をする」

「ミリアに言われたくないよ」

剣を弾いたおれの掌には、赤い筋が一本、そこからぽたりと血が流れ出した。

「その手で剣を握るのか？」

「問題ないよ」

大きく円を描くようにして両手で剣を高く掲げた。握りなおす瞬間、微かに痛んだが気にしない。

物語はクライマックス。

ラケシスとアトロポスの演武は、アトロポスの勝利で以て幕を閉

じる。過去を得、未来を見据え、まっすぐに進めと伝えるために。
運命の先を決定し、断ち切る大袂が振り下ろされる。

運命が、断たれた。

クロトが広げていた金色の布がパサリと地に落ち、おれは床に倒れ伏す。

ミリアだけが舞台の中央で剣を頭上に掲げた。

倒れ伏したおれは、ほんの少しだけ視線をあげて、おれはミリアを見上げる。

風に翻る純白の布にミリアの赤髪が映えて、天から降り注ぐ太陽が金色の大袂を照らしだして。

綺麗だな。

十分だよ、ミリア。

これだけ強くて、これだけカッコよくて、これだけ世話好きで、ヒトが好きで、これだけ綺麗なのに。誰がミリアの事、軍神アレスとして足りないなんて言うもんか。文句言っやつがいたとしたら、おれが何度だって言い聞かせてやるから――

会場いっぱいの拍手に見送られ、おれたちは神前舞踏を終えた。

まだ頭の芯が痺れているようだ。手足の感覚が薄く、まるでふわふわ浮きながら移動しているようだった。

「お疲れ様、ミリア！ グレイス！」

小道具と装飾を放り出したエレーミアがたつと駆けてきて、おれとミリアをいっぺんに抱きしめた。

「すごくかつこよかった！ 客席もビックリしてたよ」

「当たり前だ」

ミリアがにっと笑った時、客席がわあっと湧き上がった。
しまった！

「アレいさんっ」

「アレスの演武が始まる！」

ミリアと二人、競うように闘技場へと向かう。

『踊り子』の特別枠がなければ会場に入る事さえ難しかっただろう。日差しの差し込むバルコニー、特等席から見下ろした闘技場は人間で溢れかえっていた。

屈強な戦士から女性、子供に至るまで、肌の色も髪の色も年齢も性別もバラバラな人達が一心に闘技場を見下ろしている。大声で何れかを応援するヒト、息をのんで見守るヒト、それもまちまち。押し合いへし合い、あの中に入ればおれは足をつくことだって不可能だろう人間の塊が闘技場全体を埋め尽くした。

割れるような歓声が耳の奥に突き刺さる。

その中央に佇むのは、二人の剣士。

赤髪の軍神アレスと、黒髪の悪魔騎士アレイスター「クロウリー」。

「始まるようだな」

背後からかかった声には、聞き覚えがある。

おれはかすかな記憶を辿って名前を思い出した。

「えーと、ブロンデンさん。こんにちは！」

礼儀正しく挨拶をしてぺこりと頭を下げた。

「いたのか、ブロンデン。私はあの二人の試合の審判をしろと言いつけたはずだぞ？」

ミリアが驚いたように振り向いた。

ブロンデンさんは答える代わりに闘技場を指差した。

「何だ、アーディンじゃないか」

「アーディン？」

闘技場の中央には、とてもこの場に相応しくない白衣の男が立っていた。啞え煙草に無精髭、リュケイオンの民らしい淡い茶髪。

「何故あいつが審判をしているんだ？」

「アーディンがどうしてもというんで交代したまでだ。あの二人なら毎朝の稽古で手合せしている。力量も互いに承知しているはずだし、アーディンなら問題なかつた」

「アーディンが自分から働く？ そんなことがあるのか？」

ミリアが首を傾げて闘技場を見下ろした。

遠目にもやる気なく見える白衣の男に、不思議な力を感じた。この気配は。

慣れた天使の気配に、ぞわ、と背筋が泡立つ。
ヤコブが近くにいるから忘れていた。ここは、セフィロトからそう離れていないんだってこと――

「あいつなら無害だ」

しかし、おれが問う前にミリアが先回りした。

「アーデインの存在は既にオリュンポス全員が認知している。ウリエルと同じだ。侵略の意思はない。ちょうどお前たちと同じように、セフィロトから匿っている形になるな」

隠されることのない天使の気配。

よくよく探れば、それは確かにウリエル――ヤコブ「ファヌエル神父と同一の気配だった。

「あの、アーデインってヒトはウリエルの息子さんなの？」

「そうだ」

「なら安心だね」

でも、それ以上にあの男の容姿に見覚えがあった。

ふわふわした淡い茶髪。やる気のなさそうな目。それからあの啞え煙草の口元。

「でも、ヤコブとはあんまり似てないね」

「ん？ ならあいつは母似なんだろう。母親もあいつと同じ医師だと聞いた。アーデインも、あの形で居城^{ウチ}の筆頭医師だからな。ったく、医者があんな場にしゃしゃり出ること自体があり得んのだが……」

……

「医者なの？ 似合わないね」

白衣を着てるってだけじゃ……ん？ あれ？ 医者？ 母親？

「アーデインってヒトのお母さんで、もしかしてアウラ？」

「母親の名前までは知らん」

ミリアは今にも始まるうとしている演武にくぎ付けだ。

アーデインの手がずっと上がる。

それを契機に、刹那、闘技場が静まり返った。

一瞬前までの歓声が嘘のように。

アレイさんが左手で剣を構え、軍神アレスは両手で握った剣を正眼に構えた。

「勝つても負けても言いわけすんなよ？ 言い出したのはアンタだ」
中央に立つ白衣の不良医師はぼそぼそ、と呟いた。おれでなければ聞き取れなかっただろう。

「あと、あんまり熱くなるな。立ち返っても知らねえぜ？」

うるさい、とアレイさんに目ではねられ、アーデインは肩を竦めた。

「始め！」

アーデインの鋭い声で、演武が開始された。

目の前で始まった乱激戦に、観衆は息を呑んだ。

これは演武なんて名で片付けていいものなんかじゃない。

おれは目を見開いて剣先を追った。

かろうじて捕えられる切っ先は、かわした、と思った瞬間に反対側から振り下ろされる。あり得ない剣速と、戦闘で培った経験からくる読みとを合わせて繰り出される攻撃は、とても受けきれぬ気がしなかった。

思わずバルコニーの手摺を握りしめた左掌に痛みが走った。

見れば先ほど、ミリアの剣を手ではじいた時の傷が横一文字に走っていた。

そこから左手を覆う包帯が解けかかっている。

じんわりと滲みだしてくる痛み、なぜか不穏な感覚を受けた。

ずきり、と押し寄せる鈍痛に合わせて心臓が脈を打つ。

心臓の脈に合わせて、左腕に巣くう悪魔の気配が傷口から漏れ出している。

なぜ、ここで。

この場所です。

痛みから意識を逸らすようにして闘技場を見下ろした。柵を掴んだ左手が震えている。

眼下では軍神アレスとアレイさんが息つかぬ戦いを続けている。

恐ろしく無表情の二人とはいえ、動きの端々が楽しそう、と取れなくもないその打ち合いには終わりが見えず、二人とも、体力は無尽蔵なのかと疑いたくなってしまう。

お互いの力が拮抗しているからだ。

おれがミリアと戦って楽しいように、あの二人は純粋に手合せを愉しむことのできるレベルなんだ。

羨ましいな。

「……楽しそうだな」

ミリアも同じことを思っていたのか、ぽつりとそう呟いた。その横顔は複雑そうな表情を映していて、おれにはミリアがいたいどんな気持ちでいるのかわからなかった。

背後に控えていたブロンデンさんも口を閉ざし、おれは返答する機会を失った。

と、そうして視線を外した一瞬のすきに。

闘技場がどおっと盛り上がった。

はっと見下ろしたおれの目に飛び込んできたのは。

息を整えながらアレイさんを少し遠巻きに見据えた軍神アレス。

左手の剣を水平に翳したアレイさん。

そして、少し離れたところに突き刺さった軍神アレスの剣だった。

アレイさんが勝った？

が、その勝利の余韻に浸る前に、おれの左腕が悲鳴を上げた。

掌の傷がめりめり、と音を立てるように裂けていくのが分かった。

「うあっ……！」

バルコニーの手摺に押し付けるようにして左腕を抑えこんだ。

まずい。

何でこんな時に?! なんとかおさめないと……!

傷口からラースの気配が漏れ出してくる。

「どうした、グレイシャー」

「近寄るな!」

手を伸ばそうとしたミリアを牽制する。

ともすれば暴れそうになるこの腕に封じているのは、殺戮と滅びの悪魔——グラシャ・ラボラス。ひとたび降臨すれば、目に映る人間すべてを殺戮し、不落と呼ばれたディファンクタス牢獄を完膚なきまでに粉碎するほどの力が解放されてしまう。

こんなに人の多い場所で召喚されてしまえば、とてつもない災厄

になることは分かりきっている。

なんでこんな場所で……！

同じ疑問を幾度か繰り返した時、はっと気づいた。

勝利を収めた悪魔騎士に対する賞賛の拍手が、いつしか戸惑いのざわめきに変わっている。おれを見ていたミリアも、いつしか視線を闘技場に落としていた。

「あいつ、様子がおかしいぞ……？」

痛みを耐えて闘技場を見下ろすと、勝利したはずのアレイさんが地面に膝をついていた。

それに気づいたアーデインが駆け寄ろうとしたのだが、それより早く、アレイさんは剣を振っていた。

まるで何物も近づかせないという意味を表すように。

膝をつき、左手の剣を杖に立ち上がるうとしたアレイさんが、こちらに視線を向けた。

その瞬間、おれの左手ははじけ飛ぶほどの痛みを破裂させた。

「マルコ……シアス……」

自分の喉から、自分のものではない声が漏れた。

どうして？ どうしてラーズがいま……

——ちよット カラダを 借りるヨ

たどたどしい発音で囁いた悪魔の声は、確かにグラシャ・ラボラスのものだった。

「嫌だ……っ。お前、何する気だよ……！」

分かりきっている。

セフィロト国を出るあの時、ラーズが騒いだのはマルコシアスさんが召喚されたからだって。

いま、アレイさんがどうなっているのかはわからない。

ただ分かるのは、アレイさんも同じように、何か得体のしれない力で悪魔を具現化一させられようとしている《……………
・》っていう事だけだ。

ラーズはそれに引きずられているだけだ。

左掌の傷から滲んだ血が手摺を伝う。

隣でミリアが叫んでいたが、もう聴こえなかった。

――半端モノを 殺してくル だけだヨ？

「それが駄目だって言ってるんだ！」

腹の底から声を絞り出した。

息が荒い。頭が痛い。左腕の感覚は痛みを通り越して灼熱のように熱い。

駄目だ。

これ以上はもう抑えられない。

助けて。

「アレイさん……」

呟いた視線の先にあったのは、おれに向かって敵意をぶつける――
悪魔の姿だった。

アメジスト

黒髪から禍々しい角が飛び出し、紫水晶の瞳は炎に照らされたかのように真紅に染まっていた。左手にした剣は、武器の悪魔サブノツクが鍛えたもの。背に纏う翼だけがかるうじて純白を保っている。おれを見止めたその姿は、敵を目視したマルコシアスさんにそっくりだった。

助けを求めた相手は、おれと戦う相手だった。

おれの左腕に巣くう悪魔と、アレイさんの中に流れる血を分けた悪魔が片割れ同士だと知った時から、いつかこうなることは分かっていたはずだったのに、おれには覚悟つてものが足りなかった。

大丈夫だ、と言ってくれたあのヒトがおれに敵意を向けた時、いつも導いてくれるあのヒトがおれに刃を向けた時。

いったいおれはどうしたらいいのか、考えたことさえなかった。きつとアレイさんが導いてくれるからって、安心しきっていたんだ。

そのアレイさんがおれを殺そうとするって、頭の中では分かっていたっていうのに。

居城の門扉を閉ざされた時以上の衝撃が貫いた。

「ごめん……アレイさん……」

心の中に絶望が広がる。

絶望を喰って、ラーズの力が増大する。

——いいでショ？

ラーズの声を最後に、おれは軀を明け渡していた。

自分の背に膜翼が広がる。口元には牙がのび、全身に力が充満するのが分かる。左手の包帯がはじけ飛び、コインの埋まった左手甲が露わになった。

痛みは消え去り、全身を爽快感だけが覆っていた。

「あれは　ボクの獲モノ　だからネ　ルーク」

左手の甲に埋まったコインをぺろりと舐め、闘技場に在る獲物を見据えた。

もしかすると今、自分の瞳もアレイさんと同じように真紅に染まっているのかもしれない。

次の瞬間には、鋭い牙を閃かせてアレイさんに襲い掛かっていた。ガギリ、と鈍い音。

おれの爪をアレイさんの剣が受け止めた音だ。

斬られる前に、間髪入れずおれは空中に跳ね返る。

目の前を鋭い剣劇が裂いていった。

突如として現れた二体の悪魔に、客席から悲鳴が上がった。

「久しぶりだネ　半端モノ」

嬉しそうなラーズの声がする。

「そのままデいいノ？　半分のマまだと　絶対二　勝てナイよ？」

口が裂けるように嘲笑^{ワラ}う。

おれの中のラーズが笑う。

アレイさんは答えない。

^{アメジスト}

ただ赤黒く変色した紫水晶がおれを逃すまいと睨みつける。敵を見据える視線で、おれに向かって切っ先を突きつけた。

それは絶望。

嫌だよ。

こんなの嫌だ。

愛しいヒトから向けられる敵意は、何よりも痛かった。

「いいネ ルーク その絶望ハ ボクを強クスル」

いつか聞いた台詞がおれの中で木霊する。

殺戮者の爪が閃く。

膜翼が空を切る。

演武の型のように決められた軌道で、まっすぐ敵に向かって突っ込んでいく。

それは敵への最短距離を描いていた。

まるで、自分と敵以外は何も存在しないかのように。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3445o/>

ASCENDANT PRELUDE -head-

2011年11月7日03時15分発行